

へる仙人は、閑靜なる御物見所に休息し、優伶といへる仙人の類は、南の嶺の日溜まりに假臥せり、天然の甘き水は、其の清淨なる室内より湧き出で、通じ流れて川となりて、中庭を經過せり。
【注】 漫約言の曰はく、宮室本と此に止まらず、然れども、長途以下、大略具はれり、故に之れに屬するに形容優仰を以てして足れりと、○搜雅の曰はく、優伶以下の二句、一韻にして、賦の體を得たりと、

紫石振崖、欽巖倚傾、峩峩磔磔、刻削崢嶸、玫瑰碧琳、珊瑚叢生、瑤玉秀唐、瓊編文鱗、赤瑕駁犖、襍雨其閒、垂綏琬琰、和氏出焉。

【紫石】……盤石なり、【欽崖】……崖は、盤ふるなり、油の岸を整頓するなり、【峩峩】……飲つさまなり、【磔磔】……高きさまなり、【崢嶸】……高きさまなり、【玫瑰】……解は、前に見えたり、【碧琳】……青玉なり、【珊瑚】……解は、前に見えたり、【瑤玉】……文采ある石なり、【瓊編文鱗】……文采あるさまなり、【赤瑕駁犖】……赤玉なり、【襍雨其閒】……文采のまだらなるさまなり、【垂綏琬琰】……琬、玉に同じ、【和氏出焉】……美玉の名なり、【和氏】……楚の玉の代りたる玉なり、

【注】 其の豐泉の流れ込みたる池の岸は、盤石を以て整頓せり、其の盤石は、峩峩として飲ちて、倚り傾き、峩峩磔磔として高く、自然に刻み削りたるが如く、又崢嶸として高く、玫瑰、碧琳、珊瑚の珠玉は、此の處に聚まり生じ、瑤玉、秀唐の玉石は、瓊編文鱗として、文采を顯はし、赤瑕は、駁犖として、まだらなる文采を發して、其の閒に雜はり插まる、垂綏、琬琰の美玉、和氏の名玉に至るまで、皆此の邊より出づるなり、上林苑の宮殿のあたりの模倣は、此の如し、

於是乎盧橘、夏孰、黃甘、橙、棗、枇杷、檉、柿、檉、棗、楊梅、櫻桃、蒲陶、隱夫、鬱棗、楛、荔枝、羅、乎後宮、列乎北園、貽丘陵、下平原、揚翠葉、杙紫莖、發紅華、秀朱榮、煌煌扈扈、照曜鉅野。

【盧橘】……橘の如くにして、酸味多し、九月に實を結びて、翌年の二月に青黒くなる者なり、盧は、黒色のことなり、【夏孰】……熟に同じ、【黃甘】……即ち黃柑なり、【楛】……楛の類なり、【檉】……酸くして小さき果なり、【檉】……山梨なり、【檉】……は、のきなり、皮は紫となる者なり、【楊梅】……柿に似たる者なり、【檉】……やまもみなり、【櫻桃】……ゆすらうめなり、【蒲陶】……葡萄と通ず、【隱夫】……未だ詳かならず、【鬱棗】……車下李なり、【楛】……實の櫻桃に似たる者なり、【荔枝】……李に似たる者なり、【荔枝】……實の大き鶏卵の如くにして、甘味多く、酸味少なき者なり、木の高さは、五六丈にして、柱樹の如し、【貽】……延ぶといはむが如し、【杙】……挿かすなり、漢書には、杙に作れり、【秀】……華を吐くなり、【朱榮】……赤き花なり、【煌煌扈扈】……光采の盛なるさまなり、

【注】 是に於て、盧橘の實は、夏の頃に熟し、黃甘、檉、枇杷、檉、柿、檉、棗、楊梅、櫻桃、蒲陶、隱夫、鬱棗、楛、荔枝は、或は後宮に羅列し、或は北園に羅列し、丘陵の高き處に延ぶるもあれば、平原の低き處に下るもあり、翠色の葉を揚げ、紫色の莖を挿かし、紅色の華を發し、赤色の花を吐き、煌煌扈扈として、盛んなる光采を放ちて、鉅大なる原野を照らし耀かせり、

沙棠、檉、檉、華、汜、澠、檉、留落、胥餘、仁頰、并閭、欒、檀、木蘭、豫、章、女貞、長千仞、大連抱、夸條直暢、實葉蓂茂、攢立叢倚、連卷累危、崔錯發散、阮衡、闢、何、垂條扶於、落英幡纒、紛容蕭瑟、旖旎從風、瀏莅岬吸、蓋象、金石之聲、管籥之音、柴池、苾鹿、旋環後宮、雜遝累輯、被山緣谷、循阪下隰、視之無端、究之無窮。

【沙棠】……棠に似て、黃なる華を開き、赤き實を結ぶ、其の味は、李の如き者なり、【檉】……檉に似て、冬になりて、葉の落ちぬ者なり、【華】……木の皮の紫(なほ)になる者なり、【汜】……漢書には、楓に作れり、香木なり、【澠】……黃木(きはだ)なり、【檉】……黃檉(はじ又はせ)なり、【留落】……未だ詳かならず、【檉】……井間に似たる者なり、【仁頰】……檉に似たり、【并閭】……四方に張り廣がりたる枝なり、【夸條直暢】……大に茂るなり、【攢立叢倚】……衆より立つなり、【連卷累危】……幾抱(もある)なり、【崔錯發散】……垂れたる枝なり、【扶於】……扶鉢といはむが如し、四方に垂れ下がるさまなり、【落英幡纒】……落花なり、【旖旎從風】……飛び揚がるさまなり、【紛容蕭瑟】……枝の高く立ち延ぶるさまなり、漢書及び文選には、容を落し作り、蕭瑟前に作れり、【瀏莅岬吸】……風に從ふさまなり、【瀏莅岬吸】……林の木の間を風を受けて鼓動するさまなり、【金石】……鐘と磬となり、【管籥】……管は、長さ一尺、圍み一寸にして、六つの孔あり、籥は、三つの孔あり、皆笛の類なり、【苾鹿】……高低の揃はぬさまなり、【旋環】……取り捲くなり、【雜遝累輯】……入り交り、重なり合ふなり、【隰】……低くして平かなる地なり、

【注】 其の外、沙棠、檉、華、汜、澠、檉、留落、胥餘、仁頰、并閭、欒、檀、木蘭、豫、章、女貞の草木は、長さは千仞、太さは幾抱(もある)ありて、四方に張り廣がりたる枝は、眞直に暢び、實も葉も大に茂りて、衆より立ち、衆より倚り、連卷して、屈曲して、突き張り合ひ、崔錯發散として、捻ぢ曲がり、窮み合ひ、阮衡として、勁直にして、持たれ合ひ、其の垂れたる枝は、扶於として、四方に垂れ下がり、落花は、幡纒として、飛び揚がり、又其の枝は、紛容蕭瑟として、高く延び立ち、旖旎として、風に從ひて、打ち流し、瀏莅岬吸として、風を受けて鼓動する響きは、思ふに金石管籥の樂器の音に象りたるならむ、其の木立ちの柴池苾鹿として、或は高く、或は低く、後宮を取り捲きて、入り交り、重なり合ひて、其の高き者は、山に被ひかぶり、其の低き者は、谷に縁り添ひ、阪に附き循ひ、低くして平かなる地に落ち下りたるさまは、之

れを視るに端なくして、何方を起點とすべくも見えず、之れを究むるに、窮まりなくして、何方を終點とすべくも見えずなり、上林苑の果木の標は、此の如し。

於是玄猿素雌、雌、飛鷗、蛭、蜩、蠓、蜃、胡、穀、蛇、棲息乎其間、長嘯哀鳴、翩幡互經、天矯枝格、偃蹇杪顛、於是乎隄絕梁、騰殊榛、捷垂條、蹕稀閒、牢落陸離、爛曼遠遷。

【玄猿】……猿の雄は、黒きが故に、玄猿といふ、猿は、猿の俗字なり、【素雌】……猿の雌は、白きが故に、素雌といふ、【雌】……雌に似て、大にして、鼻の仰ぎて、尾の長者なり、【飛鷗】……鷗に似て、色若黒くして、能く人を攫み捕つ者なり、【蜩】……蜩、黒き者なり、【蛭】……二獸の名なり、【蜩】……蜩に似て、黄なる者なり、【蜃】……蜃に似て、頭上に毛あり、腰より下は、黒き者なり、【胡】……胡（いたち）に似て、大にして、腰より下の黄なる者なり、【穀】……未だ詳かならず、【蛇】……飛ぶさまなり、【棲】……頻りに伸ぶるなり、【枝格】……格も、枝なり、【偃蹇】……脚り高ぶるなり、【杪顛】……小枝の先なり、【天矯】……天矯に同じ、断ち切れたる橋を飛び越ゆるなり、【蹕稀閒】……蹕は、異なるなり、稀は、木の葉より生えたる木の上に跳ね上るなり、【捷】……持つなり、手を掛くるなり、【牢落】……枝なき處に足を掛くるなり、【陸離】……分かれ散るさまなり、【爛曼】……入り亂る、さまなり、【遠遷】……是に於て、玄猿、素雌、雌、飛鷗、蜩、蠓、蜃、胡、穀、蛇、棲息は、其の間に棲息して、長く嘯き、或れに嘯き、固くして、飛び跳して、彼方此方互に經過し、椹木の枝に身を置きて、頻りに伸び、小枝の先に腰を掛けて、あぶなげもなく脚り高ぶりたり、是に於て、其の獸類は、断ち切れたる橋を飛び越え、異様に葉より生えたる木の上に跳ね上がり、垂れたる枝に手を掛け、枝なき處に足を掛けなどして、牢落として、寄り添まるかと思へば、陸離として、分かれ散りて、蹕曼として、入り亂れて、遙に遠く遷り往れり、上林苑の樹上に棲める獸類の標は、此の如し。

若此輩者、數千百處、嬉游往來、宮宿館客、庖厨不徙、後宮不移、百官備具。

【若此輩者】……漢書及び文選には、輩の字なし、【庖厨】……庖厨なり、【宮宿館客】……此のやうなる場所は、數千箇所も、數百箇所もありて、天子には、嬉游行して、彼方へ往き、此方へ來り、彼の宮殿に宿泊し、此の館閣に客寓したまふに、到る處に庖厨の御事所もあれば、後宮の典御殿もありて、庖厨を徙すにも及ばず、後宮を移すにも及ばざるのみならず、百官

の諸役人まで備はり描ひて、何一つ缺けたる者なし、上林苑の總體の標は、此の如し。

於是乎背秋涉冬、天子校獵、乘鏤象、六玉舛、拖蜺旌、靡雲旗、前皮軒、後道游、孫叔奉轡、衛公驂乘、扈從橫行、出乎四枝之中、鼓嚴簿、縱獠者、江河爲陸、泰山爲櫓、車騎雷起、隱天動地、先後陸離、離散別追、淫淫裔裔、緣陵流澤、雲布雨施。

【背秋涉冬】……秋の末より、冬の初めへ掛けてなり、【校獵】……材木を以て仕切りを付けて、禽獸を喰ひ止めて、之れを取るなり、【鏤象】……象牙を以て飾りたる車なり、【六玉舛】……六は、六頭立ちにするなり、玉は、玉を以て飾りたる車なり、【拖蜺旌】……虹の如くに色取りたる旌を曳くなり、【孫叔奉轡】……孫と虎とを畫きたる雲氣に似たる旗なり、【皮軒】……車なり、車車は、兵車なり、【道游】……道は、導車なり、游は、游車なり、天子の出づるときには、五輛の導車と五輛の游車とを皮軒の跡に次ぐなり、【孫叔】……大侯の公孫實なり、【奉轡】……馬車の手綱を執るなり、【衛公】……大將軍の衛青なり、【扈從】……扈は、尾なり、天子に隨行するなり、【四枝】……四面の材木の仕切りなり、【嚴簿】……簿は、圖簿なり、行列を嚴整にするなり、【江河爲陸】……法は、獵りをする者の圓形の陣取りなり、江水より河水までの間を圓形に陣取りて、禽獸を喰ひ止むるなり、是れ其の仕組みの廣大なることを形容せるなり、【隱天動地】……物見極なり、【雷】……雷の古字なり、【雲】……雲の古字なり、【淫淫裔裔】……上林苑の標は、既に述べ終りたれば、是れより、天子の御獵りの事を述べ、さて、是に於て、秋の末より冬の初めへ掛けて、天子には、此の御苑にて、材木を以て仕切りを付けて、禽獸を喰ひ止めて、之れを獵り取る御儀あり、其の日の御行儀は、象牙を以て飾りたる御車に召させられ、玉を以て飾りたる六頭立ちの駟馬を御車に繋ぎせられ、紅の如くに色取りたる旌を曳かせられ、熊と虎とを畫きたる雲氣に似たる旗を懸かせられ、象牙を以て飾りたる車を前に立てさせられ、五輛の導車と五輛の游車とを車車に繋ぎしめられ、大侯の公孫實は、御馬車の手綱を執り、大將軍の衛青は、御馬車の徑へ乗りをし、隨行せる面々は、我れ陣中に横行して、四面の材木の仕切りの中へ陣り出でたり、斯くて、愈々御獵りは始まりて、相國の太鼓を打ち鳴らし、御行列を嚴整にし、夜の獵りする者を放ちて、自由に獵りせしめられたり、其の御獵り場の區域の廣大なることは、南は江水より北は河水に至るまでの間を圓形に陣取りて、江水と河水とを以て、禽獸を喰ひ止めて、其の中の泰山を以て、物見極とし、兵車騎馬は、雷の如くに起りて、天に震ひ、地を動かし、或は先に陣取り、或は後に陣取り、陸離として、此處彼處に離れ散りて、別々になりて、禽獸を逐ひ掛け、淫淫裔裔として、軍り行き、丘陵に縁り降り、水澤に流れ寄り、雲の如くに布き列なり、雨の如くに施し連なり、御獵りの始まりたるさまは、先づ此の如し。

倒【注】 狻猊の曰はく、此に至りて、始めて校獵の事を言へりし。
 生【注】 豹、搏【注】 豺、狼、手、熊、羆、足、野、羊、蒙、鵠、蘇、綉、白、虎、被、幽、文、跨、野、馬、陵、
 三、變、之、危、下、磧、歷、之、坻、徑、陵、赴、險、越、壑、厲、水、推、蜚、廉、弄、解、多、格、瑕、
 蛤、鉞、猛、氏、胃、驪、裏、射、封、豕、箭、不、苟、害、解、脰、陷、腦、弓、不、虛、發、應、聲、而、
 倒、

【注】 生……生け捕るなり、【能】……虎の類なり、【搏】……手にて撃つなり、【豺】……狼の類なり、【手】……手取りにするなり、【熊】……し
 々まなり、【足】……足蹴にするなり、【野羊】……山羊なり、【蒙鵠蘇】……鵠は、雉に似て、雉の強き者なり、蘇は、尾なり、鵠の尾をもち
 したる帽子を冠なり、【綉】……白、虎の皮の脚絆をはくなり、【被】……被、幽文……機織のある者物を着るなり、【跨】……三變之危……三
 つの聚まりたる山の危険なるに上るなり、【磧】……沙石のある水中の高き處なり、【坻】……漢書には、徑に作れり、徑は、徑るなり、通
 り抜くるなり、【漢書】……漢書には、峻に作れり、【厲】……腰捲き一つになりて渡るなり、【推】……弄、蜚、廉……龍雀なり、身は鳥の
 如く、頭は鹿の如き者なりとぞ、【解】……鹿に似て、一角ある者なりとぞ、【解、脰】……獸の名なり、漢書には、殺を蝦に作れり、【鉞】……鐵
 の柄の小き矛なり、【猛氏】……熊の如くにして、小さくして、毛の浅くして、光澤ある者なり、【胃】……綱に掛けて取るなり、【驪】……
 一日に一萬里を行く神馬なり、【封豕】……大なる猪なり、【射】……首筋なり、

【注】 さて、八方に分散したる者共は、或は銃、豹を生け捕り、或は豺、狼を手にて撃ち、或は熊、鵠を手取りにし、或は野羊を足蹴にせり、其の
 人との出で立ちば、鵠の尾をもち製したる帽子を冠り、白、虎の皮の脚絆をはき、機織のある者物を着、野馬に跨がりて、三つの聚まりたる
 山の危険なるに上り、沙石のある水中の高き處に下り、峻阪を通り抜け、險路へ赴き向ひ、谷を越え、深き水を腰捲き一つになりて渡りて、
 蜚廉を弄び、解を弄び、蝦蛤を手にて打ち殺し、猛氏を殺すの柄の小き矛にて突き殺し、鵠を綱に掛けて取り、大なる猪を射止めたり、
 其の射出たず矢は、假り初めに物を害せずして、獸類の首筋を解き割り、鵠を落とし入れ、其の引き絞る弓は、虚しく發せずして、弦音に
 應じて、狙ひし者は倒れたり、

於是乎乘輿彌節、裴回、翱翔往來、睨部曲之進退、覽將率之變態、
 然後浸潭促節、憊、復遠去、流離輕禽、蹇履、狡獸、轉、白、鹿、捷、狡、兔、軼、

赤電、遺、光、耀、追、怪物、出、宇宙、彎、繁、弱、滿、白、羽、射、游、泉、揅、蜚、虞、擇、肉、
 後、發、先、中、命、處、弦、矢、分、藝、殪、仆、

【注】 赤電……上文の「射」に同じ、【怪物】……解は、前に見えたり、【宇宙】……解は、前に見えたり、【彎】……曲は、部の小分けなり、【繁】……
 車……車は、帥と通ず、【裴回】……漸冉とすはむが如し、次第よりなり、【裴回】……馬車の手綱を緩めて、調子を早むるなり、【憊】……
 ……疾く遠きさまなり、【流離】……困苦せしむるなり、【蹇履】……蹇倒し踏み倒すなり、【轉】……前の「轉」の轉に同じ、【捷】……手取り
 にするなり、【軼】……過ぐるなり、追ひ越すなり、【出】……天地四方を字とし、往古來今を宙といふ、世界の外にまで出づるなり、
 【彎】……引くなり、【繁弱】……夏后氏の弓の名なり、【滿】……引き絞るなり、【游泉】……野に游べる泉なり、泉は、泉羊なり、人に似て、長き
 脛ありて、人を食ふ者なりとぞ、【揅】……撃つなり、【蜚虞】……神獸の名なり、頭は鹿の如く、身は龍の如き者なりとぞ、【殪】……其の
 志す所の者を指し言ふなり、【藝殪】……藝は、的なり、動かぬ的に射中する如く、其の物の倒れ死ぬるなり、

【注】 是に於て、御召しの御馬車は、手綱を控へて、調子を取りて、裴回して、進まずして、鳥の羽根を廣げて飛ぶが如くに雲霧に往來して、天
 子には、各隊部曲の進退を睥睨したまひ、將帥指揮者の變態異狀を覽望したまへり、然る上に、御召しの御馬車は、浸潭として、次第より
 に手綱を緩めて、調子を早めて、驚驚として、遠く去れり、其の迅速なること、身の輕き鳥を困苦せしめ、素早き獸を蹇倒し、踏み倒し、白き鹿
 を車の手綱の先にて突き殺し、素早き兎を手取りにし、赤色の電光を追ひ越して、其の光耀を跡に残し、さまざまの怪物異獸を追ひ掛けて、
 世界の外まで出で、繁弱といへる夏后氏の真弓を引き、白羽の矢を引き絞りて、野に游べる泉を射止め、蜚虞を撃ち、禽獸の肉を擇びて、其
 の射取るべき者を定めたる上に、發つ矢は、其の中たるに先立ちて、其の志す所の者を指し言ふに、弦と矢との離れ分かるゝとたんに、動
 かぬ的に射中する如く、其の物をここに倒れ死にたり、

然後揚節而上浮、陵、驚、風、歷、駭、飈、乘、虛、無、與、神、俱、麟、玄、鶴、亂、昆、雞、
 遁、孔、鸞、促、駭、鷁、拂、鷺、鳥、捎、鳳、皇、捷、駕、雛、掩、焦、明、

【注】 揚節……馬車の手綱を愈々緩めて、益々調子を早むるなり、【上浮】……空中に上り浮かぶなり、【驚風】……驚くべき大風なり、【駭】……
 ……驚くべき暴風なり、飈は、飈の俗字なり、【鷁】……黒き羽を車輪に掛けて引き漬すなり、【昆雞】……鶏に似て、黃白色の者な
 り、【遁】……迫るなり、【孔】……解は、前に見えたり、【鷁】……解は、前に見えたり、【促】……追るなり、【鷁】……上文の鷁に同じ、【驚
 鳥】……九疑の山に産する鳥にして、五色の文采ある者なり、【捎】……手取りにするなり、【駕雛】……をしりの雛なり、雉を驚かし、
 を驚かし、【焦明】……西方の鳥にして、鳳凰に似たる者なり、

迫り、狼狽に追り、驚鳥を追ひ拂ひ、風塵を手取りにし、驚の難を手取りにし、無明をひかれり、

道盡塗殫、迴車而還、招搖乎襄羊、降集乎北紘、率乎直指、闔乎反、
鄉、蹙石闕、歷封巒、過雉鵠、望露寒、下棠梨、息宜春、西馳宣曲、濯鷓、
牛首、登龍臺、掩細柳、觀士大夫之勤略、鈞獠者之所、得獲、觀徒車、
之所、麟轅、乘騎之所、蹂若、人民之所、蹈躡、與其窮極倦頽、驚憚、惛、
伏、不被、劊刃、而死者、佗佗籍籍、填坑滿谷、揜平彌澤、

【招搖乎】……逍遙乎に同じ、ゆらめくさまなり、【襄羊】……彷徨といはむが如し、去り来りするさまなり、【北紘】……紘は、維なり、北の隅なり、【率乎】……直ちに去るさまなり、【直指】……漢書には、指乎に作れり、疾く歸るさまなり、【闔乎】……返り向ふなり、【蹙石闕】……踏むなり、【石闕】……封巒……露寒……皆物見所の名なり、【棠梨】……宜春の名なり、【西馳】……西の方宜曲宮へ向ひて馳せ、驪の形を畫きたる御座船を牛首の池に通過し、露寒の御物見所に登り、細柳の御物見所に止まりたり、さて、此の處にて、天子には、隨行したる士大夫の勤略と智略とを觀察したまひ、夜の獵りせし者の手に入れたる獲物の多少を平均したまひ、衆徒の兵車の車輪に掛け引き潰したる禽獸と、乘馬騎士の馬足に掛けて踏み潰したる禽獸と、人民の足下に掛けて踏み潰したる禽獸と、其の禽獸の獵り立てられ追ひ詰められて、困窮の極度に達して、倦々疲れて、獵り人を見て、驚き憚り、氣を失ひて平伏して、刃物の疵を被らずして、自ら氣絶して死にたる者とを觀察したまひしに、其の死骸は、佗佗籍籍として、入り交り、積み累なりて、坑を塞ぎ、谷に滿ち、平原を掩ひ、水澤に滿ちて、見渡す限り獲物ならざる處處とはなかりけり、上林苑の御獵りの濟みて、還御になりたる御機様は、此の如し、

於是乎遊戲懈怠、置酒乎昊天臺、張樂乎轆轤之宇、撞千石之鐘、立萬石之鉦、建翠華之旗、樹靈鼉之鼓、奏陶唐氏之舞、聽葛天氏之歌、千人唱、萬人和、山陵爲之震動、川谷爲之蕩波、巴、檜、宋、蔡、淮南、于遮、文成、顛歌、族舉、遞奏、金鼓迭起、鏗鎗鏘磬、洞心駭耳、荆、吳、鄭、衛之聲、韶、護、武、象之樂、陰淫案衍之音、郢、郢、繽紛、激楚、結風、俳優侏儒、狄鞮之倡、所以娛耳目而樂心意者、麗靡爛漫於前、靡曼美色於後、

【昊天臺】……其の高きこと天に上るが如き臺なり、【轆轤之宇】……廣やかなる屋宇なり、【鉦】……漢書及び文選には、鐘に作れり、或は、鐘を懸くる者なり、【翠華之旗】……翠羽をもて天蓋としたる旗なり、【靈鼉之鼓】……鼉の皮を張りたる太鼓なり、【陶唐氏】……帝堯の名なり、【萬石之鉦】……昔の帝王の號なり、【蕩波】……波立つなり、【巴、檜】……皆地の名なり、其の人は、剛勇にして、舞ひを好みたるが故に、舞ひの名とす、【宋、蔡】……皆國の名なり、即ち其の國々の歌曲なり、【于遮】……歌曲の名なり、【文成】……遂西の縣の名なり、其の人は、善く歌へり、【蔡】……蔡州の縣の名なり、其の人は、能く西南夷の歌を作れり、【族舉、遞奏】……軍り舉がり、互に奏するなり、【迭起】……互に起るなり、【鏗鎗、鏘磬】……鐘の音するさまなり、【洞心、駭耳】……鐘太鼓の音の人の胸を突き抜くなり、【荆、吳、鄭、衛】……皆國の名なり、荆は、楚の一名なり、即ち其の國々の歌曲なり、【郢、郢】……皆楚の音楽なり、【郢、郢】……皆楚の地名なり、【繽紛】……舞ふさまなり、【激楚、結風】……皆楚の國の歌曲の名なり、執れも急調にして哀切なる者なり、【俳優侏儒】……狂言役者なり、侏儒は、身の丈の短き役者なり、【狄鞮】……西戎の樂樂の名なり、【倡】……女藝者なり、【麗靡爛漫】……美しき音樂のさまなり、【靡曼美色】……舞ひの手振りの花やかなるなり、

波立つばかりなり、而して、巴、渝の兩地の舞ひ、宋、蔡の二國の歌曲、淮南の地方の子述の歌曲、遠西の文成縣の歌曲、益州の頓縣の歌曲など、一度に軍り奉り、互に奏し、鐘太鼓の聲、互に起りて、鐘の響きは、鏗鏘たり、太鼓の音は、鏗鏘たり、其の音響は、人の胸を突き抜き、人の耳を駭かせり、又荆、吳、鄭、衛の四國の歌曲、帝舜の音楽の節、殷の湯王の音楽の節、周の武王の音楽の節、周公旦の音楽の節、陰淫案衍のたはけたる歌曲、楚の鄭、郢の地方の繽紛たる舞ひ、楚の國の急調にして哀切なる歌曲の激楚、結風など、悉く備はりて、中國の狂言役者は更なり、西戎の蠻樂なる伏龍を奏する女藝者に至るまで、人の耳目を慰め、人の心意を樂ましむべき者は、皆樂堂の前列に麗麗備備として美音を奏し、後列に麗麗美色の花やかなる舞ひの手振り呈したり、御獵りの後の音楽の模様は、此の如し。

若夫青琴、宓妃之徒、絕殊離俗、妖冶嫺都、靚莊刻飭、便嬛綽約、柔
橈嬛嬛、媚媚姘姘、世獨繭之、褕施、眇閭易以、戍削、媠媠徹循、與世
殊服、芬香漚鬱、酷烈淑郁、皓齒粲爛、宜笑的礫、長眉連娟、微睇絲
藐色授魂與、心愉於側、

【青琴、宓妃】……皆昔の神女の名なり、【絶殊離俗】……天下無雙なるなり、【妖冶】……美好なるなり、【嫺都】……雅麗なるなり、【靚莊】……
……おしろいの白く、まゆずみの黒きなり、【刻飭】……彫刻したるが如くに飾り立つるなり、【便嬛】……軽く麗しきさまなり、【綽約】……細
緩やかに優しきさまなり、【柔橈】……骨體の柔かにして、長く麗やかなるさまなり、【媠媠】……愛敬あるさまなり、【徹循】……細
かにか弱きさまなり、【褕施】……曳くなり、【獨繭】……單純なる絹織なり、【眇】……瞳の下の縁（へり）なり、【閭易】……美妙な
るさまなり、【戍削】……衣裳の長ささまなり、【媠媠】……家の中の縁（へり）なり、【徹循】……歩みさま
のしとやかなるに連れて、衣服の姿態たるさまなり、【芬香漚鬱】……香氣の盛んなるなり、【皓齒】……白齒なり、【粲爛】……鮮明
なるさまなり、【宜笑】……笑顔なり、【的礫】……鮮明なるさまなり、【長眉】……長き眉毛なり、【連娟】……眉毛の曲がりて細やかなるさま
なり、【微睇】……ちろと視るなり、【絲藐】……遠くを視るさまなり、【心愉於側】……悦喜するなり、

魂魄を彼れに許して興へたく思ふ程になりて、其の心神は、美人の側に悦喜せり、御獵りの後の御酒宴の模様は、此の如し、
【浸雅陸】の曰はく、此れ獵りの畢はりて燕することを言へりと、

於是酒中樂酣、天子芒然而思、似若有亡、曰、嗟乎、此泰奢侈、朕以
覽聽餘閒、無事弃日、順天道以殺伐、時休息於此、恐後世靡麗、遂
往而不反、非所以爲繼嗣、創業垂統也、

【酒中】……酒宴の中程なり、【芒然】……惘然とすむが如し、志しを失へるさまなり、【亡】……物を取り失ふなり、【泰】……甚だなり、
【覽聽餘閒】……文書を覽、訴訟を聽く、政事の餘暇なり、【弃日】……空しく時日を棄つるなり、【順天道】……秋の肅殺の氣候に順應す
るなり、【休】……息なり、【於此】……苑園の中に休息するなり、【遊】……遊びに耽るさまなり、
【浸雅陸】……是に於て、御酒宴の中程になりて、御樂みの程よき頃、天子には、茫然として御志しを失ひたまひて、何事をか思し召し出だされて、御
手に持たせられたる物を取り失ひたまへる如き御様子ありて、仰せられて曰はく、嗟、甚だ奢侈なる事どもなり、
朕は、軍臣の奏進する文書を覽、訴訟を聽く、政事の餘暇に、何事もなく空しく時日を棄つることを無益なりと思ひたるをもて、天地自然の
秋の肅殺の氣候に順應して、田獵殺伐の事を擧げ行ひて、其の時をもて、此の苑園の中に休息せり、さりながら、朕が甚だ奢侈なる仕方を見
習ひて、後世子孫の爲めに帝業を創建し皇統を垂れ殘すべき仕方にはあらぬなり、斯く仰せられて、深く後悔したまへり、
【浸雅陸】の曰はく、嗟乎より以下は、是れ前に云へる所の其卒章歸之於節儉、因以風諫なりと、

於是乃解酒罷獵、而命有司曰、地可以墾辟、悉爲農郊、以贍萌隸、
隕牆填塹、使山澤之民得至焉、實陂池而勿禁、虛宮觀而勿仞、發
倉廩以振貧窮、補不足、恤鰥寡、存孤獨、出德號、省刑罰、改制度、易
服色、更正朔、與天下爲始、

【墾辟】……開墾するなり、【贍】……給するなり、【萌隸】……萌は、供に同じ、隸は、奴隸なり、至りて鄙しき者をいふ、【墾】……取り崩す
なり、【填】……埋むるなり、【塹】……堀なり、【至】……草を取り薪を取りに來るなり、【實陂池】……實は、滿つるなり、溜め池に人民を充

満せしめて、勝手に魚類を取らざるなり、一説には、實は、城に同じ、埋め立つるなりといへり、【無初】……初は、満つるなり、役人を充満せしめずして、之れを廢止するなり、【樂】……老いて妻なき者なり、【妻】……老いて夫なき者なり、【孤】……幼くして父なき者なり、【獨】……老いて子なき者なり、【振】……救ふなり、【德】……恩徳の號令なり、【正朔】……正は、正月なり、朔は、朔日なり、曆法をいふ、是に於て、天子には、速に御酒宴を解散せしめられ、御獵りを罷めさせられて、掛かりの役人に命じたまひて曰はく、【山林苑の土地は閉鑿して、殘らず郊野の農田として、田畑を持たぬに至りて師しき者共に給與せよ、苑の周圍の垣牆を取り崩し、堀を埋め立て、山林水澤の人民をして、遠慮なく苑中の草を取り薪を取りに來らしめよ、苑中の溜め池に人民を充満せしめて、勝手に魚類を取らしめて、之れを禁斷せぬやうにせよ、苑中の宮殿、及び物見所を空虚にして、役人を充満せしめずして、之れを廢止せよ、倉庫を發き、米粟を散じて、天下の貧窮者を救ひ、生計の足らざる者を補ひ、饑寒孤獨の身寄りなき者を存恤撫育せよ、今より以來、恩徳の號令を出だし、刑罰の備條を省き、禮よの制度を改軍し、衣服の色目を變易し、正朔の曆法を更正して、天下中の人と共に、政事を一新せむと、此に政令軍制の基は開かれぬ、

於是歷吉日以齋戒、襲朝衣、乘法駕、建華旗、鳴玉鸞、游乎六藝之圃、驚乎仁義之塗、覽觀春秋之林、射狸首、兼騶虞、弋玄鶴、建干戚、載雲罕、揜羣雅、悲伐檀、樂樂胥、修容乎禮園、翱翔于書圃、述易道、放怪獸、登明堂、坐清廟、恣羣臣、奏得失、四海之內靡不受獲、於斯之時、天下大說、嚮風而聽、隨流而化、喟然興道而遷義、刑錯而不用、德隆乎三皇、功羨於五帝、若此、故獵乃可喜也、

【歷】……選ぶなり、【襲】……着るなり、【法駕】……儀式の馬車なり、天子の車を金根車といふ、其の馬は六頭立るにして、侍中の役人添へ乗り、御供の馬車は三十六頭なり、【華旗】……立派なる旗なり、【玉鸞】……天子の馬車に付きたる鈴のことなり、【大鷹】……時、書、易、春秋、禮、樂なり、【春秋】……大鷹の一つの春秋經なり、【狸首】……狸首は、逸詩なり、騶虞は、詩經の國風の部の召南の篇の名なり、此の二篇の詩は、弓を射る時の禮に用ゆる者なり、【玄鶴】……古樂の名なり、【干戚】……干は、楯なり、戚は、斧なり、【騶虞】……大鷹の名なり、【羣雅】……詩經の大雅、小雅なり、【伐檀】……詩經の國風の部の魏風の篇の名なり、此の詩は、位に在る人の貪慾なるを諷刺せる者なり、【樂胥】……詩經の小雅の部の桑扈の篇なり、其の詩に君子樂胥、萬邦之屏とあり、胥は、材智ある人なり、材智ある人の位に在るを樂むなり、【朝朝】……朝は、前に見えたり、【明堂】……清廟……明堂は、王者の諸侯を朝會する處なり、清廟は、其堂に在る五帝の廟なり、【獲】……獲りの獲物なり、恩惠に譬ふ、【刑錯】……刑罰を差し置くなり、【三皇】……大昊伏羲氏、炎帝神農氏、黃帝軒轅氏、

氏なり、【英】……溢るなり、【五帝】……黃帝軒轅氏、顓頊高陽氏、帝堯高辛氏、帝舜陶唐氏、帝禹有虞氏なり、一説には、少昊金天氏と顓頊以下の四氏となりといへり、

是に於て、天子には、是れまでの山林苑の御獵りと事變はりて、道徳仁義を射獵したまふこととなりて、吉日を選びたまひて、御身を清め物忌みたまひて、朝廷に臨ませらるる時の御衣を召したまひ、御儀式の御馬車に乗りたまひ、立派なる旗を建てたまひ、御馬車に付きたる天鷹の鈴を振り鳴らしたまひて、詩、書、易、春秋、禮、樂の圖圓に遊びたまひ、仁義の道途に馳せたまひ、善惡褒貶の込み入りたる春秋經の森林を管顧したまひ、弓を射る時の禮に用ゆる狸首の詩篇を射止めたまひ、又同様の時に用ゆる騶虞の詩篇を射止めたまひ、玄鶴といへる古樂を矢に紐を付けて引き寄するや、射の仕方をもて射取たまひ、楯と斧とを御馬車に建てたまひ、騶虞といへる大鷹を御馬車に載せたまひ、大雅、小雅の羣雅の詩經を御覽になりて樂みたまひ、禮記の圖圓に君子の容儀を修め整へたまひ、書經の圖圓を鳥の羽根を廣げたる如く、鷹揚に見廻りたまひて、昔の帝王君臣の道をあさり取りたまひ、陰陽吉凶の事を辨ずる易道を述べ廣めたまひ、山林苑の奇禽怪獸を放ち棄てたまひ、王者の諸侯を朝會する明堂に登りたまひて、其の堂に在る五帝の廟に坐したまひ、羣臣をして、其の思ふ儘に天下の政事の得失を奏聞せしめられたれば、四海の内の萬民は、一人として其の恩徳の獲物を拜受せざることをなかりけり、されば、此の時に於て、天下中の人は、皆大に満足して、一同に上の風に向ひて、其の號令を聽き、上の流れに従ひて、其の習はしに化し、喟然として、歎息して、道徳に與りて、道徳を行ひ、仁義に邁りて、仁義を行ひて、不義無道なることをする者なくなりたれば、刑罰は差し置きて用ゆることなく、唯々其の名あるばかりになりぬ、其の皇徳は、昔の三皇より隆んにして、其の帝業は、昔の五帝より溢れたるなり、道徳仁義を射獵したまふ結果は、此の如くなるが故に、此の御獵りは、禽獸の御獵りと違ひて、國家の爲めに、誠に喜ぶべきことなり、天子の道徳仁義に傾きたまひし、公益の廣大なることは、此の如し、

董仲舒の曰はく、此れ道徳を射獵する者なりと、

若夫終日暴露馳騁、勞神苦形、罷車馬之用、玩士卒之精、費府庫之財、而無德厚之恩、務在獨樂、不顧衆庶、忘國家之政、而貪雉兔之獲、則仁者不由也、從此觀之、齊楚之事、豈不哀哉、地方不過千里、而囿居九百、是草木不得墾辟、而民無所食也、夫以諸侯之細、而樂萬乘之所、侈僕恐百姓之被其尤也、

【玩】……控くなり、【萬乘】……天子なり、【尤】……咎めなり、災難なり、

士平の精力を挫折し、府庫の金銀財寶を浪費して、德音厚意の恩澤なく、務めて獨りの樂みを取るに在りて、人民衆庶の苦痛を顧みず、國家の政事を忘却して、雉免などの獲物を貪り求むるが如きは、民を愛する仁者の由りてせざるべし、此の理に依りて觀察すれば、齊、楚二國の君の事は、いかで哀しきことならざらむ、實に哀しきことなるべし、其の領分は、僅に千里四方に過ぎずして、其の苑囿は、九百里四方に居ることなれば、是れ草木のある處は、開墾することを得ずして、人民は、耕作物に食む所なきなり、全體、齊、楚二國の如き諸侯の微細なる身分をもて、萬乘の天子の奢侈なりとして戒めたまひしことを樂むは、心得難きことにして、僕は、之れが爲めに、其の領分の百姓の災難を被らむことを氣遣ふなり」と、以上、無是公の議論なり。

於是二子愀然改容超若自失、逡巡避席曰、鄙人固陋、不知忌諱、乃今日見教、謹聞命矣。

【愀然】……顔色の變はるさまなり、「超若」……事の意外に出でたるに呆る、さまなり、「逡巡」……尻込みをするなり。

是に於て、子虛と烏有先生との二子は、愀然として、顔色を變へて、其の容體を改め直し、超若として、事の意外に出でたるに呆れて、自ら其の手に持たる物を取り失ひたるが如く、尻込みをして、膝へ下がりて、其の座席を譲り避けて曰はく、「僕等の如き田舎者は、固陋寡聞にして、人に對して遠慮することを知らずして、益もなき自慢話をせり、今日幸に天子の御靈りの事に就きて教訓せられたれば、固く其の教命を聞きて、心に堅く記憶して、以後は決して國王の奢侈なることを語りざるべし」と、子虛と烏有先生と無是公との談話は、是れにて終はりたり」と、以上、司馬相如の子虛の賦なり、司馬相如は、此の賦をもて主上を諷諫したるなり。

【王世貞の曰はく、子虛上林は、材極めて富み、辭極めて麗し、而して、運筆極めて古雅に、精神極めて流動し、意極めて高し、及ぶべからざる所以なり、長沙は、其の意ありて、其の材なし、班固は、其の材ありて、其の筆なし、子雲は、其の筆ありて、其の精神流動の處なしと、

賦奏天子以爲郎、無是公言天子上林廣大、山谷水泉萬物、及子虛言楚雲夢所有甚衆、侈靡過其實、且非義理所尚、故刪取其要、歸正道而論之。

【司馬相如は、此の賦を天子に奏聞せしに、天子には、大に感心したまひて、遽に司馬相如をもて、郎官とせられけり、此の賦の中に、無是公の天子の上林苑の廣大なること、山谷水泉萬物の事を言ひ立てたること、及び子虛の楚の雲夢の中にある物事を言ひ立てたること甚だ衆くして、侈靡過實なること、其の實際に過ぎ越えて、上林苑も、雲夢も、此の賦ほどにはあらぬなり、しかのみならず、其の文章は花やか

なれど、義理に於ては、尙び重んずべきことにあらぬが故に、其の不用なる部分を削り、其の肝要なる部分を取りて、其の卒章の天子の奢侈を戒めたる正しき處に歸着して、之れを論述せり。

【王維楨の曰はく、此れ子長の史筆の斷案なりと、

相如爲郎數歲、會唐蒙使略通夜郎、西犍中、發巴蜀吏卒千人、郡又多爲發、轉漕萬餘人、用興法、誅其渠帥、巴蜀民大驚恐、上聞之、乃使相如責唐蒙、因喻告巴蜀民、以非上意。

【略、通夜郎、西犍中】……略は、巡行することなり、略取の義にはあらず、漢書には、略の字、西の字なし、「轉漕」……轉は、車にて運ぶなり、漕は、船にて運ぶなり、「興法」……軍興の法なり、即ち軍律なり、「渠帥」……大帥なり、頭立ちたる者なり。

【司馬相如は、郎官となりて、數箇年勤め續きたるに、其の頃、以前の鄯陽縣の令の唐蒙といふ者、西南夷の夜郎と西犍中との二箇國に巡行交通して、巴蜀の二郡の役人兵卒千人を徵發せしが上に、此の二郡は、又多く唐蒙の爲めに、水陸より糧食器具を運送する人夫一萬餘人を徵發し、唐蒙は、軍律を用いて、其の命令を奉ぜざる頭立ちたる者を誅戮せしかば、巴蜀の人民は、大に驚き恐れたるに會へり、主上には、其の事を聞こし召されて、司馬相如を差し向けられて、唐蒙の不都合なる計らひ方を詰責せしめられたれば、其の序いでをもて、唐蒙の所爲は、主上の思し召しにあらざる旨を巴蜀の人民に告諭せり。

【凌稚隆の曰はく、非上意の三字は、民を諭す本旨なれば、太史公特に首めに之れを掲げたりと、

檄曰、告巴蜀太守、蠻夷自擅、不討之日久矣、時侵犯邊境、勞士大夫、陛下卽位、存撫天下、輯安中國、然後興師出兵、北征匈奴、單于怖駭、交臂受事、誄膝請和、康居西域重譯、請朝稽首、來享移師、東指閩越、相誅、右弔番禺、太子入朝、南夷之君、西犍之長、常效貢職、不敢怠墮、延頸舉踵、喁喁然皆爭歸義、欲爲臣妾、道里遼遠、山川

阻深不能自致

【檄】……二尺ばかりの板に書きたる弱れ文なり【斬安】……和らげ安んずるなり【單子】……天の廣大なるさまなり、匈奴の天子の稱なり【交臂】……兩手を組み合はするなり【鴻臚】……詔は、屈と通ず、膝を屈むるなり【重譯】……數箇國の通譯の手を履るなり【稽首】……頭を地に付けて暫く止むるなり【來享】……來りて其の國産を獻上するなり【闕】……東越なり【越】……南越なり【帛】……南越の東越に伐たれたる不幸を見舞ひて救ふなり【忘隙】……隙は、情と通ず【嗚嗚然】……衆口の上に向ふさまなり

【司馬相如の筆を執りて、巴、蜀の人民に告諭せる弱れ文に曰はく、巴、蜀二郡の太守に告ぐ、變夷の者共、自ら氣儘の所行を働きたれど、漢に於ては、之れを大目に見逃がして、久しき間、其の罪を罰せざりければ、變夷は、愈々驕り高まりて、折りく、漢の邊境を侵犯して、士大夫を辛勞せしめたり、陛下には、位に即きたまひて、天下の人民を存問憐恤したまひて、中國を和らげ安んじたまひし後に、始めて軍勢を興たし、兵卒を出だしたまひて、北の方向匈奴を征伐せしめたまへば、匈奴の天子の單子は、大に恐怖驚駭して、兩手を組み合はせて、我が命じたる事柄を聽き受け、兩膝を折り屈めて、和陸せむことを申し請ひ、頭を地に付けて拜禮して、來りて其の國産を獻上せり、又軍勢を移して、其の意を通じて、入朝して、天子の御機嫌を伺はむことを申し請ひ、頭を地に付けて拜禮して、來りて其の國産を獻上せり、又軍勢を移して、東の方へ指し向はしめたまへば、閩即ち東越と、越即ち南越とは、互に誅して、南越は、東越に伐たれたり、又右の方向南越の東越に伐たれたる不幸を見舞ひて、兵を發して、其の都の番禺を救はしめたまへば、南越の天子の嬰齊は、御恩に感じて、入朝せり、南夷の君も、西夷の長も、常に貢ぎ物を獻上し、職掌を奉行して、決して怠惰することなく、頭をえりくびを延べ、踵へくびすを擧げて、嗚嗚然として、口を揃へて、上に向ひて、皆我れ後れじと、先を争ひて、漢の德義に歸服し、男子は、漢の臣僕となり、女子は、漢の婢妾となりたく思へども、道路の里程遠くにして、山は險阻に、川は深くして、自ら其の意を達すること能はざるなり、

夫不順者已誅而爲善者未賞故遣中郎將往賓之發巴蜀士民

各五百人以奉幣帛衛使者不然靡有兵革之事戰鬪之患

【中郎將】……唐蒙の役名なり【賓】……賓服せしむるなり、德に傾きて歸服せしむるなり【衛使者不然】……使者の不意の變を警衛せしむるなり【兵革之事】……兵は、兵器なり、革は、甲冑なり、軍事をいふ

【夫れ朝廷に對して恭順ならざる國は、已に誅戮せられて、王化を蒙り、善事を行ふ國は、未だ恩賞せられざるが故に、中郎將の唐蒙を使者に遣はされて、其の地方へ往きて、之れを賓服せしめられむとの御意に、巴、蜀の二郡の士民各五百人を徵發して、使者の手土産の幣帛を捧げ持たしめ、使者の不意の變を警衛せしめられたるまでのことにして、決して兵革の事、戰鬪の心配あるにはあらぬなり、】

【唐蒙の曰はく、不順者已誅は、北の方向匈奴を征し、師を移して東に指すの類はれなり、爲善者未賞は、南夷、西夷貢職を效し、争ひて義に歸する者はれなり、此の兩句、前段の意を關照せりと、】

今聞其乃發軍興制驚懼子弟憂患長老郡又擅爲轉粟運輸皆

非陛下之意也當行者或囚逃自賊殺亦非人臣之節也

【興制】……軍律を用ひて、頭立ちたる者を誅戮するなり【自賊殺】……自害するなり

【然るに、今、聞き及びたる様子にては、中郎將は、巴、蜀の二郡に於て、安りに軍勢を徵發し、軍律を用ひて、其の命令を奉ぜざる頭立ちたる者を誅戮して、子弟を驚かし懼れしめ、老人長者を心配せしめたるが上に、巴、蜀の二郡は、又自儘に數多の大夫を徵發して、中郎將の爲めに、兵糧の初米を運轉輸送せしめたりとのことなるが、是れ皆陛下の思召しにはあらぬなり、又聞き及びたるには、其の軍人となり、人夫となりて、行くべきことに相當せし者は、皆其の賦役を厭ひ嫌ひて、或は逃亡し、或は自害せりとのことなるが、是れ亦人臣たる者の節義にはあらぬなり、】

【唐蒙の曰はく、皆非陛下之意也は、前を結び、亦非人臣之節也は、後を生ずと、】

夫邊郡之士聞烽舉燧燔皆攝弓而馳荷兵而走流汗相屬唯恐居後觸白刃冒流矢義不反顧計不旋踵人懷怒心如報私讎彼豈樂死惡生非編列之民而與巴蜀異主哉計深慮遠急國家之難而樂盡人臣之道也

【烽舉燧燔】……晝の相國の煙りの舉がり、夜の相國の火影の見ゆるなり【攝弓】……弓に矢をつがへて持つなり【不旋踵】……くびすを返して敵にうしろを見せぬなり【編列之民】……編列は、編戸なり、平民の戸籍に編入せられたる人民なり

【全體、邊境の諸郡の士は、晝の相國の煙りの舉がり、夜の相國の火影の見えて、煙の寄せ来る知らざるを聞けば、皆弓に矢をつがへて、持ちて、駆け出で、兵刃を荷ひて、走り出で、汗を流して、跡より跡より引き續きて、唯一人に後れを取らむことを氣遣ひて、敵の白刃に觸れ當たり、敵の流矢を冒し被りても、義として跡を振り向かず、其の計ること、くびすを返して敵にうしろを見することなく、人毎に怒れる心を懷きて、寄せ来る敵を討ち取りむとすること、さながら自分一己の仇讎に怨み返し報ゆるが如く、他人の事とは思はざるなり、彼の邊境の諸郡の士とて、いかで死ぬることを樂み、生くることを恐るる者にして、平民の戸籍に編入せられたる人民にあらずして、巴、蜀の人民と君主を異にせる者なるべき、其の死ぬることを恐るる者にして、平民の戸籍に編入せられたる人民にあらずして、巴、蜀の人民に同じ、巴、蜀の人民に同じ、其の殺ける君主も、巴、蜀の人民に同じ、而して、巴、蜀の人民と違ひて、逃亡せず、自害せず、敵に向ひて猛進せるは、其の計ること深く、慮ること遠くして、一身の事を思はず、國家の難を急にして、棄て置かずして、人臣たるべき道を行ひ盡し、さむことを樂めばなり、】

【漢雅陸の曰はく、樂盡人臣之道は、非人臣之節の句と相關たりと、】

故有剖符之封析珪而爵位爲通侯居列東第終則遺顯號於後世傳土地於子孫行事甚忠敬居位甚安佚名聲施於無窮功烈著而不滅是以賢人君子肝腦塗中原膏液潤野草而不辭也

【剖符】諸侯とする證據の剖符を二つに分けて、其の半分を天子の手に置き、半分を諸侯に渡すなり、【析珪】珪は、分かつなり、珪は、瑞玉なり、瑞玉を分かち與へて、爵位を授くる證據とするなり、【通侯】列侯なり、【東第】帝城の東の大名小路の邸宅なり、【功烈】烈は、業なり、【中原】中國なり、

邊境の諸郡の士は、此の如く人臣たるべき道を行ひ盡くすが故に、上に於ても、之れを手厚く待遇せられて、其の恩賞には、剖符を剖き與へて、封土を授けらるゝことあり、瑞玉を分かち與へて、爵位を授けらるゝことあり、其の居位は、列侯となり、其の居宅は、帝城の東の大名小路の邸宅に列なり、其の一生を芽出度終れば、顯榮なる美稱を後の世に残し、拜領したる土地を子孫に傳ふるなり、而して、其の行ふ事は、甚だ忠誠恭敬にして、其の居る位は、甚だ安泰逸樂なり、其の名聲の評判は、窮まりなき千萬年の後までも施き及ばし、其の功業は、著はれ聞えて、消滅することなし、是を以て、賢人君子は、己の肝腦腸胃を中國の泥土に塗り付け、己の膏油血液を以て、野中の草を濡らすを辭退せずして、國家の爲めに、身命を抛つなり、

王維楨の曰はく、此れより上、先づ邊境の諸郡の士を以て、之れを形はして、其の愧心を發せしめ、今奉幣より以下に至りて、方に正義を以て、之れを責むと、○董份の曰はく、當時巴、蜀の民、未だ嘗て兵を知らず、故に邊境の職に習へる者をもて、之れに風示せり、

今奉幣役至南夷即自賊殺或囚逃抵誅身死無名諡爲至愚恥及父母爲天下笑人之度量相越豈不遠哉然此非獨行者之罪也父兄之教不先子弟之率不謹也寡廉鮮恥而俗不長厚也其被刑戮不亦宜乎

【奉幣役】手土産の幣帛を捧げ持たせて、賦役を勤めさせるなり、即ち上文の奉幣帛に同じ、漢書には、役を使に作れり、然るときは、使者の自ら幣帛を捧げ持ちて、使ひに往くこと、なるなり、【子弟之率】子弟の道理に備ひ由るなり、

に至らしめむとすれば、人民は、其の賦役を厭ひ嫌ひて、卽座に自害する者もあれば、逃亡する者もありて、皆誅戮を受くるに至り、其の身は空しく大死にをして、何等の名譽もなく、死にたる後には、至りて愚人なりといふ位を付けられて、其の恥辱を父母にまで及ぼして、天下の笑ひ物となれり、同じき人にてありながら、巴、蜀と邊境の諸郡との人の度量の、一方は愚者の方に立ち越え、一方は賢者の方に立ち越えたること、いかで甚だ遠からぬことかは、甚だ遠きことならむ、さりながら、巴、蜀の人民の斯くまで心得違ひをせるは、獨り賦役に行く者の罪ばかりにはあらぬなり、其の根本は、父兄の教へ、平日に先立ち行き届かざるより、子弟の道理に備ひ由ること諱まずして、廉恥の心自然に薄らぎて、風俗の優長敦厚ならざるに因るなり、此の譯けなれば、其の人民の心得違ひをして刑戮せらるゝも、亦尤なることならざらむや、尤なることなるべし、

陛下患使者有司之若彼悼不肖愚民之如此故遣信使曉諭百姓以發卒之事因數之以不忠死囚之罪讓三老孝弟以不教誨之過方今田時重煩百姓已親見近縣恐遠所谿谷山澤之民不徧聞檄到亟下縣道使咸知陛下之意唯母忽也相如還報

【使者】唐蒙を指す、【有司】郡の諸役人を指す、【信使】誠信なる使者なり、司馬相如の自身を指す、【死囚】自害と逃亡となり、【三老孝弟】孝賢帝の時に、三老孝弟の職を置きて、人民を教導せしめたり、【田時】農業の時節なり、【重】憚るなり、【徧】縣に蠻夷の部落あるを道といふ、

陛下には、使者の唐蒙の安りに軍勢を徵發し、軍律を用ひて、其の命令を奉ぜざる頭立ちたる者を誅戮し、郡の諸役人の自儘に數多の人夫を徵發して、使者の爲めに、糧食を運送せしめたること、彼れが如くなることを心配したまひ、又不肖なる愚民の賦役を厭ひ嫌ひて、或は自害し、或は逃亡したること、此の如くなることを怒然に思召されたるが故に、此の度、誠信なる使者を遣はされて、百姓に士卒を徵發せられたる事を曉諭せしめられ、それによつて、百姓の上に對して不忠にして、或は自害し、或は逃亡せし罪を責め告めしめられ、又三老孝弟の職に在る者の平素子弟を教導せざる過失を責め告めしめられたり、されば、里巷の遠近に拘はらず、一と面諭すべき筈なれど、方今は、農業の時節なれば、懸と百姓を呼び寄せて迷惑を掛けむことを氣の毒に思ひて、已に近縣の人民だけに、親しく達して、遠くから曉諭したれども、遠く所の谿谷山林水澤の人民の落ちもなき之れを聞き及ばざらむことを氣遣ふが故に、此の觸れ文を廻して、遍達するなり、されば、觸れ文到着せば、速に之れを縣道蠻夷の末々にまで觸れ下して、漏れなく陛下の思召しを知らしめて、心得違ひの者なきやうにせよ、ゆめ／＼之れを輕忽にして、粗略にすることあるべからずと、以上、司馬相如の觸れ文なり、さて、司馬相如は、かたの如く、巴、蜀の二郡に主上の御趣意を觸れ示したる後に、都へ戻りて、其の趣きを言上せり、

【檄】檄の曰はく、末篇の數語、通達するに前意を以てせり、漢文には此の法多し、患、使者有司之若彼、軍を發し、制を興こし、擅に轉輸

をせるは、陛下の意にあらざることを激せり、悼不肖愚民之知。此は、凶逆し、自ら賊殺するは、人臣の節にあらざる、身死して名なく、益せられて愚民となる意を激せり、遣信使、曉諭百姓、以發卒之事。一は、願はざる者は已に誅せられて、善をする者は未だ賞せられず、故に中郎將を遣はして之れを責せしむ、而して士民には特に使者の不然を衛らしむる意、皆其の中に關聯せり、數之以不忠死之罪、關三老孝弟、以不教誨之過、是邊士の忠を盡くして、行く者の能くせず、父兄の教への先んぜざる意、亦其の中に關聯せり、文字最も關聯ありと〇樓防の曰はく、一篇の文、全く是れ武帝の爲めに、過まちを交り、非を飾りて、最も人主の心術を害せり、然れども、文字委曲回護し、出脱して覺えず、又全然使者有司の不是なることを道はずして、百姓をして、一牛の不是に當たらしめむことを要せり、最も善く辭を爲して、深く告諭の體を得たりと、〇余有丁の曰はく、賦を作れば、修廢にして、檢を作れば、明切渾厚なり、此れ其の相如の文たるなりと。

唐蒙已略通夜郎、因通西南夷道、發巴蜀廣漢卒、作者數萬人、治道二歲、道不成、士卒多物故、費以巨萬計、蜀民及漢用事者多言其不便、是時邛笮之君長聞南夷與漢通、得賞賜多多、欲願爲內臣妾、請吏比南夷。

【物故】……其の人死ぬれば、其の人の持ち物蓄くなるが故に、人の死ぬることを物故といふ。【巨萬】……萬萬といはむが如し。さて、唐蒙は、已に夜郎に巡行交通せしかば、其の序いでを以て、西南夷の道路を開通せむと思ひて、巴蜀、蜀郡、廣漢郡の士卒を徵發せり、而して、其の道路を作事する者數萬人にして、之れを修治すること二箇年及びたれど、其の道路は、成就せずして、士卒は、多く死亡し、費用は、萬萬の大金を以て計ふる程に掛かりたれば、蜀の人民、及び漢の朝廷にて事を扱ふ羽振りのよき者、多く其の不便なることを言ひ立てたり、是の時、西夷の邛笮と笮國との君長は、南夷の漢と交通して、恩賞の賜物を得ること多しと聞き込みて、其の君長等は、多く漢の内屬の臣妾とならむことを願ひ、漢の役人を其の國內に置かれむことを請ひて、南夷と肩を並べたく思ひたり。

天子問相如、相如曰、邛笮、冉駹者近蜀、道亦易通、秦時嘗通爲郡縣、至漢興而罷、今誠復通、爲置郡縣、愈於南夷、天子以爲然、乃拜相如爲中郎將、建節往使、副使王然于、壺京國、呂越人、馳四乘之

傳、因巴蜀吏幣物以略西夷。

【愈】……勝るなり、【建節】……使者の證據の制り符の旗を押し立つるなり。天子には、邛國、笮國の君長の内屬せむことを願ひ出でたるに就きて、司馬相如の見込みを尋ねたまひしに、司馬相如の曰はく、「邛國、笮國、冉國、駹國は、蜀郡に近くして、道路を開通し易ければ、秦の時には、嘗て一たび其の道路を開通して、郡縣とせしが、漢の興くるに至りて、之れを罷め廢せり、今、誠に重ねて其の道路を開通して、郡縣を置ることせば、其の便利なること、南夷に勝るなり」と、天子には、司馬相如の見込みを尤なりと思ひ召されて、司馬相如に中郎將の役を拜命せしめられて、使者の證據の制り符の旗を押し立て、西夷へ使者に往かしめられたり、司馬相如は、仰せを承りて、副使の王然于と壺京國と呂越人との三人と共に、四輛の宿衛の馬車を馳せて、巴、蜀の二郡の役人の手にて調達したる土産物を西夷に略ふことせり。

至蜀、蜀太守以下郊迎、縣令負弩矢、先驅蜀人、以爲寵、於是卓王孫、臨邛諸公、皆因門下獻牛酒、以交驩、卓王孫喟然而歎、自以得使女尚司馬長卿、晚而厚分、與其女財、與男等同。

【郊迎】……城の郊外まで出迎ふるなり、【弩矢】……弩弓の矢なり、弩は、仕掛けにて射る弓なり、【寵】……光榮なり、【交驩】……驩は、歡に同じ、懇意を結ぶなり、【尚】……嫁付くるなり、公主にあらざるして此の字を使ひたるは、特例なり。さて、司馬相如は、盛んなる行列にて蜀郡まで到着せしに、蜀郡の太守以下の面々は、城の郊外まで出迎へ、縣令は、弩弓の矢を背負ひて、其の行列の先乗りをしたれば、蜀郡の人々は、司馬相如の役目を光榮なりと思ひたり、是に於て、卓王孫を始めとし、臨邛縣の身柄ある諸公は、皆司馬相如の門下の人々に依頼して、牛と酒とを進物として、司馬相如に懇意を結びたり、而して、卓王孫は、喟然として、歎息して、自ら思ひけるやう、我が娘の文君を司馬長卿に嫁付けしむることを得たること、甚だ遙かりき、此のやうなる人物ならば、早く嫁付くべかりしものをと、新しく感服して、手厚く其の娘に財産を分け與へて、己れの男子と同等にせり。

司馬長卿便略定西夷、邛笮、冉駹、斯榆之君、皆請爲內臣、除邊關、關益斥、西至沫若水、南至牂牁、爲徼、通零關道、橋孫水、以通邛都、還報天子、天子大說。

〔序〕…廣まるなり、〔微〕…水邊に橋を構へたる中國、夷狄との界なり、
〔註〕さて、司馬相如は、やすくと西夷を略取平定し、邦國、符國、冉國、臨國、新輪國の君長は、皆申し請ひて、漢の内臣となりて、邊境の關門
を取り拂ひたれば、其の關門は、益々遠方へ廣まりて、漢の内臣は多くなりぬ、其の結果として、西の方は、沫若水に至り、南の方は、鮮河江
に至りて、水邊に橋を構へたる中國、夷狄との界を取り極め、零關の道路を開通し、孫水に橋を掛けて、邦國に交通せり、さて、司馬相如は、
首尾よく、使者の役目を果たして、都へ戻りて、其の趣きを天子に言上したれば、天子には、大に満足したまひけり、

相如使時、蜀長老多言通西南夷不爲用、唯大臣亦以爲然、相如
欲諫業已建之、不敢、乃著書籍以蜀父老爲辭、而已詰難之、以風
天子、且因宣其使指、令百姓知天子之意、

〔註〕「唯大臣亦以爲然」…此の唯は、雖の字の輕き意に用ゐたるなり、即ち大臣もなり、「業已建之」…既に西夷に郡縣を置くことの
便利なることを建白せしなり、「籍」…借るなり、「指」…旨と通ず、總意なり、
〔註〕司馬相如の西夷に使ひせし時に、蜀郡の老人長者は、多く西南夷に交通することの無益なることを發言し、朝廷の大臣達も、亦其の說を
尤なりと思ひたれば、司馬相如は、上下の輿論に従ひて、西南夷に交通することを諫めむと思ひたれども、天子の御尋ねに對して、既に西夷
に郡縣を置くことの便利なることを建白して、跡へ引かれぬ場合ひになりたれば、強ひて之れを諫めずして、別に書物を著して、蜀郡の
父兄長老の言葉を作りて、己れ自ら父兄長老を詰難問して、それにて天子を諷諫し、且つは、其の序いでをもて、己
れの西夷に使ひする總意を宣明して、百姓をして、天子の思召しを知らしめたり、

其辭曰、漢興七十有八載、德茂存乎六世、威武紛紜、湛恩汪濊、羣
生澍濡、洋溢乎方外、於是乃命使西征、隨流而攘、風之所被、罔不
披靡、因朝冉從、定符存、邛、略斯、檣、舉苞滿、結軌還轅、東鄉將報、
至于蜀都、耆老大夫薦紳先生之徒二十有七人、儼然造焉、

〔註〕「七十有八載」…有は、又と通ず、載は、年なり、七十の上に又八年なり、七十八年は、孝武帝の元光六年に當たれり、「六世」…高祖、孝
惠帝、呂太后、孝文帝、孝景帝、孝武帝なり、「紛紜」…盛んなるさまなり、「湛恩」…深恩なり、「汪濊」…深廣なるさまなり、「澍濡」…

恩澤に潤ふなり、漢書には、滂沱に作れり、「洋溢乎方外」…四方の境の外にまで流れ出づるなり、「西征」…西の方へ行くなり、「擯」…
…退却するなり、「結軌」…車輪の跡を旋らすなり、「耆老」…長老なり、六十歳を著といふ、「薦紳」…薦は、縮と通ず、縮は、指に同じ、
笏を挿むなり、紳は、大帯なり、裝束を著用したる貴人をいふ、「儼然」…いかめしきさまなり、「造」…至るなり、到來するなり、
〔註〕其の著はしたる書物の言葉に曰はく、「漢は、始めて興りてより、今茲元光六年までにて、七十八箇年立ちて、其の德澤の茂盛なるこ
と、高祖より、御當代まで、六世の間に存續し、威武は、紛紜として、盛んにして、深恩は、汪濊として、廣深なり、内國の羣生衆庶の其の恩澤
に潤へるのみならず、其の恩澤は、四方の境の外にまで流れ出でたり、是に於て、天子には、使者に命じて、西の方へ行かしめたまへば、其の
國よの君長は、さながら水の流に隨ふ如く退却し、威徳の風の被る所は、草木の如く開き盛ることなし、さるに因りて、冉國を入朝せ
しめ、駹國を服従せしめ、符國を平定し、邛國を保存し、新輪國を略取し、西夷の一種の意滿を丸取りにして、車輪の跡を旋らし、車の轍
(ながえ)を引き戻して、東の方京師へ向ひて、其の趣きを言上せむとして、蜀郡の都まで到着せしに、其の地の長老、大夫、裝束を著用したる
貴人、先生の徒、二十七人打ち揃ひて、威儀儼然として、使者の旅館に到來せり、

辭畢、因進曰、蓋聞天子之於夷狄也、其義羈縻、勿絶而已、今罷三
郡之士、通夜郎之塗、三年於茲、而功不竟、士卒勞倦、萬民不贍、今
又接以西夷、百姓力屈、恐不能卒業、此亦使者之累也、竊爲左右
患之、且夫邛、笮、西、夔之與中國、竝也、歷年茲多、不可記已、仁者不
以德來、彊者不以力并、意者其殆不可乎、今割齊民以附夷狄、弊
所恃以事無用、鄙人固陋、不識所謂、

〔註〕「辭畢」…而會の挨拶の済むなり、「羈縻」…牛馬を繋ぎ止むるやうに牽制するなり、「三郡」…巴と蜀と廣漢となり、「贍」…足る
なり、「累」…難累なり、「齊民」…貴賤上下の差別なき一般の人民なり、
〔註〕此の二十七人の面々は、使者に對して、而會の挨拶済みて、さて、一同に進み出で、曰はく、「我れくのかはかたに聞き及びたるには、
天子の夷狄を取り扱ひたまふことは、其の義理として、惡事をせざらしめむが爲めに、さながら牛馬を繋ぎ止むるやうに牽制して、縁を切
らざるまでのごとにて、禮儀をもて之れを治むることとなり、今、巴、蜀、廣漢の三郡の士卒を疲弊せしめて、夜郎國の道途を開通せむと
せらるること、茲に三箇年になりたれど、其の土功は成り上らずして、士卒は疲勞倦怠し、萬民の衣食は足らずして、殊の外難澁せり、さ
るを、今又之れに西夷を開通することを接續せられたれば、百姓の力は屈辱して、其の樂を卒ふること能はざらむことを氣遣はるゝなり、

此れも亦使者の首尾の罪累となることなりと思はるれば、内にて使者の左右の方々の爲めに心配せり、しかのみならず、全體、中園、
孫國、西楚國の中國と並び立てること、茲に多くして、其の年代を記憶せられぬ程に久し、古語に、仁者といへども、夷狄の
國は、恩徳をもて招き來さず、強者といへども、夷狄の國は、威力をもて併吞せずとあり、思ふに西夷に交通することは、國家の爲めに宜
しからぬに近からむか、今、貴賤上下の差別なき一般の人民を愛せらるべき恩徳を割き分ちて、牛馬の如き夷狄を手に付け、味方と恃り、
中國の士卒を疲弊せしめて、無用の土地を手に入れむことを仕事とせらるゝは、如何なる譯けか、我等の如き田舎者は、固陋寡聞にして、何
とも申すべきことを辨へぬなり」と、二十七人の面々は、かやうに苦情を訴へたり、

使者曰、烏謂此邪、必若所云、則是蜀不變服、而巴不化俗也、余尚
惡聞若說、然斯事體大、固非觀者之所覩也、余之行急、其詳不可
得聞已、請爲大夫、麤陳其略、蓋世必有非常之人、然後有非常之
事、有非常之事、然後有非常之功、非常者、固常之所異也、故曰非
常之原、黎民懼焉、及臻厥成、天下晏如也、

【觀者】……世の常の物事を觀察する者なり、【見】……見るなり、【行】……旅行なり、【變】……變着しなり、【原】……始めなり、【黎民】……
衆民なり、【晏】……至るなり、【晏如】……落ち着きたるさまなり、
【使者】は、人々の苦情を聞き、之れを詰問して曰はく、「貴公等は、何とて左様なることを謂はる、ぞ、屹度貴公等の云はるゝ如くは、
らば、是れ巴、蜀の二郡は、昔の夷狄の慣習を脱せずして、蜀の人は、野蠻の衣服を變易せず、巴の人は、野蠻の風俗を改化せざるなり、余が
如き不才の者にては、尙ほ此の如き論議を聞くことを惡み嫌ひ、さりながら、此の事體は、極めて重大なれば、世の常の物事を觀察する者
の見分けらるべきことなりぬなり、余れの旅行は、取り急げば、其の事柄の詳細なることは聞かせられぬと、大夫先生の方の爲めに、其の大略
を荒増し開陳せむことを請ふ、余れ思ふに、世の中には、屹度非常の人物ありて、然して後に、非常の事柄あり、非常の事柄ありて、然して後
に、非常の事柄あり、其の非常といふことは、固より常に異なることなり、されば、古語に曰はく、「非常の始めは、常人に分からぬ故に、
衆民は、之れを懼れて、其の成り行きを氣遣へども、其の事柄の成就するに至るに及びては、天下中の人は、皆晏如として、落ち着きて、
大に安心するなり」と、
【渡】渡雅隆の曰はく、世必有非常之人の數句は、是れ冒頭なり、以後は、總べて只此の意を發明せりと、

昔者鴻水浮出、汎濫衍溢、民人登降、移徙、陟、隴、而不安、夏后氏戚

之、乃堙鴻水、決江、疏河、漉沈、贍菑、東歸之於海、而天下永寧、當斯
之勤、豈唯民哉、心煩於慮、而身親其勞、躬胝無、膚不生毛、故休
烈顯乎無窮、聲稱決乎于茲、

【鴻水】……鴻は、洪と通ず、大水なり、【浮出】……湧き出づるなり、【汎濫衍溢】……水の大に溢るゝなり、【登降】……水を避けて、山坂を登り
降りするなり、【陟、隴】……山路を歩行するさまなり、【原】……憂ふるなり、【決】……切り落とすなり、【漉】……通ず
るなり、【沈、贍】……其の深き水を分散して、其の災害を安んじ定むるなり、【膚不生毛】……皮膚には、毛を生ずるに作れり、膚は、安んずるなり、【躬胝】……
……身の皮の厚くなるなり、【休烈】……美功なり、【決乎于茲】……于茲は、今茲といはむが如し、當今まで
……津と浦とに知れ渡りたるなり、
【今、其の非常の一例を挙げむに、昔し、帝堯の御時に、天下に大水湧き出で、其の水大に溢れたれば、人民は、之れを避けて、山坂を登り
降りして、此處へ移り彼處へ往りて、陟、隴として、山路を歩行して、片時も安堵せざりけり、夏后氏の大禹之れを憂へて、人民の難儀を救は
むとして、大水を塞ぎ止め、江水を切り落とし、河水を疏通し、其の深き水を分散して、其の災害を安んじ定めて、大水を東の海へ歸らしめた
れば、天下は、それより永久に安寧になりき、此の大水を始末する勤勞の場合に當たりては、いかで唯人民のみ勤勞したることなるべ
き、大禹の心に思慮を煩はして、其の勤勞を自身に執りしことなれば、身の皮は板の如くに厚くなり、股の間の小き毛まですり切れて、全
身の皮膚に毛を生ぜざる程に難儀せり、大禹の非常に苦心せしこと、此の如くなるが故に、其の美功は、窮まりなき後々の世に顯はれて、其
の廣大なる評判は、當今まで津と浦とに知れ渡りたり、是れ非常なる一例なり、
【董仲舒の曰はく、禹の事に比べたるは、類せずといへども、然れども、正に以て非常を明かさむと欲したるなりと、

且夫賢君之踐位也、豈特委瑣握、拘文牽俗、循誦習傳、當世取
說云爾哉、必將崇論閎議、創業垂統、爲萬世規、故馳騫乎兼容并
包、而勤思乎參天貳地、且詩不云乎、普天之下、莫匪王土、率土之
濱、莫非王臣、是以六合之內、八方之外、浸溥衍溢、懷生之物、有不
浸潤於澤者、賢君恥之、

【委瑣】…些細なるなり、【提攜】…せよこまじきさまなり、【拘攣】…細微の文字に拘泥するなり、【幸俗】…世俗の議論に牽制せらるるなり、【循誦】…口にて誦すること、因循するなり、【習傳】…傳へ聞きたることに習ふなり、【當世取説】…當時の人の満足を買ふなり、【崇論】…高論なり、【閎議】…大議なり、【參天貳地】…徳を天地に比ぶるなり、【當世取説】…當時の人の満ち天子と地とにて二つになるなり、之れを天地に比ぶるが故に參天貳地といふ、即ち天子と地とにて三つになるなり、天の徳とは、萬物を覆ふ徳なり、地の徳とは、萬物を載する徳なり、【詩】…詩經の小雅の部の北山の篇なり、【普天之下】…天の普く覆ひたる下の世界なり、【率土之濱】…率は、循ふなり、濱は、邊なり、舟車の通ずる土地の隅々までなり、【六合】…天地四方なり、【八方】…四方四維なり、維は、隅なり、【浸淫行溢】…水の物を漬すが如く満遍なく行き渡るなり、【懷生之物】…一切の生きむことを思ふ物なり、【一】…一切の生きむことを思ふ物なり、しかのみならず、全體、賢明なる君主の天子の位を譲り世を治めたまふには、いかで只些細なることに目を付け、提攜として、せよこましくして、細微なる文字に拘泥し、世俗の議論に牽制せられ、口にて誦すること、因循し、傳へ聞きたることに習ひて、尋常一様の事をして、當時の人の満足を買ふのみなるべし、屹度高論大議して、天下國家の爲めになるべき大事業を創建して、其の統緒を後世子孫に垂れ傳へて、萬世の法規とせむとせらるるが故に、何事に限らず、廣く兼ね容れ併はせ包まむことに馳騁勉勵したまひて、其の思念を地の徳に比べて、地と共に二つになり、天地の徳に比べて、天地と共に三つにならむことを勤めたまふなり、しかのみならず、詩經にも云ひたることにはあらざるか、【天の普く覆ひたる下の世界は、王の土地にあらずることなく、皆王の土地なり、舟車の通ずる土地の隅々まで、其の人民は、王の臣下にあらずることなく、皆王の臣下なり】と見えたることは、貴公等も既に知られたるなり、天子の威徳の廣大なること、此の如し、是をもて、外より見れば、天地四方の六合の内、中より見れば、四方四維の八方の外まで、水の物を漬すが如く満遍なく行き渡りて、其の恩澤を蒙るべき物のものにて、人を始めとし、一切の生きむことを思ふ天地間の生物にして、其の恩澤に漬り潤はざる者あれば、賢明なる君主は、其の天職の行き届かざることを深く恥ぢ入りたまふなり。

今封疆之内、冠帶之倫、咸獲嘉祉、靡有闕遺矣、而夷狄殊俗之國、遼絕異黨之地、舟輿不通、人迹罕至、政教未加、流風猶微、内之則犯義侵禮、於邊境、外之則邪行橫作、放弑其上、君臣易位、尊卑失序、父兄不辜、幼孤爲奴、係纍號泣、内嚮而怨、曰、蓋聞中國有至仁焉、德洋而恩普、物靡不得其所、今獨曷爲遺己、舉踵思慕、若枯旱之望雨、斂夫爲之垂涕、況乎上聖、又惡能已。

【冠帶之倫】…衣冠束束したる人類なり、【嘉祉】…幸福なり、【闕遺】…恩澤に漏るるなり、【流風】…徳化の及ぼす所なり、【係纍】…繩目に掛かるなり、【洋】…溢るるなり、【斂夫】…斂は、戻の古字なり、人情に戻りたる強情者なり、

今、中國の封疆の内に住める衣冠束束したる人類は、殘らず上の恩澤を蒙りて、一人として其の恩澤に漏れたる者あることなし、然れども、夷狄の風俗を殊にせる國、遙に掛け離れて、中國人と仲間を異にしたる土地は、舟車も通せず、人の足迹も至ること稀にして、中國の政令教育、まだ加はり届かず、中國の徳化の及ぼす所、猶ほ微弱なれば、之れを内にして、朝敵を通ずる者となれば、邊境に對して、其の守るべき義理を犯し、其の行ふべき禮儀を侵し、之れを外にして、棄て置きて構はぬ者となれば、甚邪なることを行ひ、自儘なることを勤めて、其の君上を放逐弑虐し、君臣は地位を易へ、尊卑は秩序を失ひ、父兄の長者は罪あらずして殺戮せられ、幼孤の弱者は奴隸となり、繩目に掛かりて、泣き叫びて、内の方中國へ向ひて、怨みかこちて曰はく、【嗚呼、聞き及びたるには、中國には、至極の仁君ありて、其の徳澤は洋溢して、其の恩惠は普及し、一物として其の所得て安堵の思ひをせざるることなしとむ、斯く有り難き天子にてありながら、今獨り如何なれば已ればかりを取り殘されたる哉と、夷狄の者は、斯く怨みかこちて、くびすを擧げて、中國を望みて、思ひ慕へること、萬物の枯死する大旱の時に當たりて、夕立ちの雨を待ち望むが如し、此の有様を聞き及べば、人情に戻りたる強情者すら、之れが爲めに、涕を流す程なれば、況して無二の聖徳ある天子には、又いかで能く之れを棄て置きたまふべき、

故北出師以討彊胡、南馳使以誚勁越、四面風徳、二方之君鱗集、仰流願得受號者、以億計、故乃關沫若、徼牂牁、零山梁、孫原、創道德之塗、垂仁義之統、將博恩、廣施遠、撫長駕、使疏逝不閉、阻深闇昧、得耀乎光明、以偃甲兵於此、而息誅伐於彼、遐邇一體、中外提福、不亦康乎、

【誚】…責むるなり、【風徳】…成徳に感化するなり、【二方】…西夷の邛、僂と南夷の牂牁、夜郎となり、【鱗集】…魚の集まりて仰ぎ向ひて水の流れを承くるが如きなり、【億】…億は、十の萬なり、【關沫若】…關は、關山なり、沫若、水名なり、【徼牂牁】…徼は、邊なり、牂牁、地名なり、【零山梁】…零は、散るなり、山梁、地名なり、【孫原】…孫は、孫水なり、原、原野なり、【創】…開闢するなり、【億計】…億に及ぶ計なり、【關沫若】…關は、關山なり、沫若、水名なり、【徼牂牁】…徼は、邊なり、牂牁、地名なり、【零山梁】…零は、散るなり、山梁、地名なり、【孫原】…孫は、孫水なり、原、原野なり、【創】…開闢するなり、【億計】…億に及ぶ計なり、【關沫若】…關は、關山なり、沫若、水名なり、【徼牂牁】…徼は、邊なり、牂牁、地名なり、【零山梁】…零は、散るなり、山梁、地名なり、【孫原】…孫は、孫水なり、原、原野なり、【創】…開闢するなり、【億計】…億に及ぶ計なり、

て、沫若水に關所を設け、鮮阿江の水邊に橋を構へて、中國と夷狄とを仕切り、零山を閉鑿して、道を通じ、雲道縣を置き、孫水の源に橋梁を掛け渡し、道徳の行はる、道途を創始し、仁義の統緒を垂れ示して、恩を博くし、施を廣くし、遠く無慮し、長く駕御して、疎遠なる國をして、閉鎖せしめず、險阻幽深開昧不明の國をして、中國の光明に耀くことを得しめむとせられたり、此の如くにして、甲兵の凶器を此方に仕舞ひ置きて、殊伐の沙汰を彼方に止め、遠近を一體にして、彼我の差別を立てず、中國も外夷も、皆幸福に安んぜば、是れ亦安廉なることならずや、安廉なることなるべし、

【俗性修の曰はく、委瑣より以下は、常なる者なり、崇隆宏遠より以下は、非常なる者なり、殊俗異域を成すは、功の非常なる者なり、既述不閉より以下は、厥の成るに疎りて天下晏如たるなりと、

夫拯民於沈溺、奉至尊之休德、反衰世之陵遲、繼周氏之絕業、斯乃天子之急務也、百姓雖勞、又惡可以已哉、且夫王事固未有不始於憂勤、而終於佚樂者也、然則受命之符、合在於此矣、方將增泰山之封、加梁父之事、鳴和鸞、揚樂頌、上咸五、下登三、觀者未睹指、聽者未聞、音猶鶴鳴、已翔乎寥廓、而羅者猶視乎藪澤、悲夫、

【休德】……美德なり、【陵遲】……丘陵の段々に卑くなるが如きなり、【受命之符】……天命を受けて天子となりたる符瑞なり、【合在於此】……憂勤佚樂の中に在るべしなり、【封】……土を盛りて天を祭ることなり、【和鸞】……天子の馬車に付きたる鈴のことなり、其の鈴の馬車に建てたる轂に付きたる和といひ、馬の銜（くつわ）に付きたるを鸞といふ、【樂頌】……音樂頌詩なり、頌は、徳を譽むることなり、【咸五】……五帝と徳を同じくするなり、【登三】……三王の上に登るなり、【鶴鳴】……漢書には、明を朋に作れり、文選には、鶴に作れり、其の形風凰に似たりとぞ、【寥廓】……天外の廣遠なる處なり、【羅者】……鳥網を持ちたる者なり、

【俗性】……自ら抑へ退くなり、【遷延】……退却するなり、

於是諸大夫芒然喪其所懷來、而失厥所以進、喟然竝稱曰、允哉漢德、此鄙人之所願聞也、百姓雖怠、請以身先之、敵罔靡徙、因遷延而辭避、

【芒然】……解は、前に見えたり、【懷來】……胸に蓄へ来るなり、【允哉】……實に尤なることなり、【敵罔】……志しを失へるさまなり、

其後人有上書言相如使時受金失官居歲餘復召爲郎、

相如口吃而善著書常有消渴疾與卓氏婚饒於財其進仕宦未

嘗肯與公卿國家之事稱病閒居不慕官爵

【口吃】……物を言ふことの速るなり。

司馬相如は、物を言ふこと速りて、辯舌は拙けれど、上手に書物を著して、文章をもて、其の意を述しけり、常に樽酒といふ持病ありて、壯健なるのみならず、卓氏と結婚して、財産富饒なりければ、其の進み出で、仕官せし時にも、一度も三公九卿の國家の政事を評議することに關係せず、時と病氣なりと申して、己の家に引き籠もりて、閑靜に起居して、官爵を貪り慕はざりけり。

【司馬相如】……嘗と通ず、疾なり。

常從上至長楊獵是時天子方好自擊熊羆馳逐野獸相如上疏諫之

司馬相如は、前方に主上の御供をして、長楊宮へ至りて、獵りをせしことありしが、是の時、天子には、自ら熊羆などを撃ち殺し、野獸を驅り立て逐ひ廻すことを好みたまへる最中なりければ、司馬相如は、其の場に於て、簡條書きの書面を差し上げて、之れを陳めたり。

其辭曰臣聞物有同類而殊能者故力稱烏獲捷言慶忌勇期賁育臣之愚竊以爲人誠有之獸亦宜然

【捷】……舉動の敏捷なるなり、【賁育】……孟賁と夏育となり。

其の言葉に曰はく、「臣が兼く承り及びたるには、世の中のものには、其の種類を同じくして、其の働きを殊にする者あり、それ故に、力量の拔萃なることに於ては、何人も、秦の武王の時、力士の烏獲の事を譽め、舉動の敏捷なることに於ては、吳王の僚の子の慶忌の事を言ひ、勇氣の非凡なることに於ては、昔の勇士の孟賁、夏育を自當として、此の兩人に限るとせりとすることなるが、臣が愚昧なる心にて、内考へ思ふには、烏獲の力量、慶忌の早業、孟賁、夏育の勇氣の如く、人類の上には、誠にも其の働きを殊にすることあることは勿論なれど、獸類の上にも、亦其の働きを殊にすることあるべきは、當然のことにして、油断のなかりことなりと存するなり。

今陛下好陵阻險射猛獸卒然遇軼材之獸駭不存之地犯屬車之清塵輿不及還轅人不暇施巧雖有烏獲逢蒙之伎力不得用

枯木朽株盡爲害矣是胡越起於穀下而羌夷接軫也豈不殆哉雖萬全無患然本非天子之所宜近也

【軼材】……軼は、逸と通ず、勝れたる働きなり、【駭不存之地】……猛獸の不意なる所に駭き立つなり、【犯屬車之清塵】……天子の馬車に連屬したる馬車に突き掛かるなり、之れを屬車と言ひたるは、天子の馬車といふことを憚りて、遠廻しに言ひたるなり、馬車の駭け行くときは、塵の揚がるものなれば、塵と言ひたるなり、之れに清の字を添へたるは、尊ぶ意なり、【逢蒙】……昔の弓の名なり、【伎力】……伎倆と力量となり、伎は、逢蒙に屬し、力は、烏獲に屬す、【駭】……車の心轉の通りたる輪にして、輻(ヤ)の葉まりたる所なり、【軻】……車の後部の横木なり。

今、陛下には、好みて險阻なる山坡を乗り越えたまひて、猛獸を射止めたまへり、若し卒然として俄に勝れたる働きある獸類に出で遇ひたまひて、其の猛獸は、不意なる所に駭き立ちて、陛下の御馬車に連屬したる馬車の清塵に突き掛かりたりむには、御馬車の軻は、車の轆(ながえ)を引き展すにも間に合はず、御供の人は、其の巧みなる業前を施す暇もなくして、昔の力士の烏獲の如き力量あり、昔の弓の名人の逢蒙の如き伎倆ある者ありといふとも、其の力を用ゐることを得ず、其の御道筋に横たはりたる枯れたる木、朽ちたる株の如き物まで、殘らず其の場の害をして、御馬車の自由を妨ぐるなりむ、是れ取りも直さず胡、越の外寇車駭の下に起り立ちて、羌夷の外寇車軻に接近するが如きものなり、いかに危殆なることかは、諸事の御手當て行き留きて、萬と安全にして、さる心配はなしとはいへど、猛獸の如きは、本より天子の近づきたまふべきものにはあらぬなり。

且夫清道而後行中路而後馳猶時有銜櫛之變而況涉乎蓬蒿馳乎丘墳前有利獸之樂而內無存變之意其爲禍也不亦難矣夫輕萬乘之重不以爲安而樂出於萬有一危之塗以爲娛臣竊爲陛下不取也

【中路】……道路の中央を擇ぶなり、【有銜櫛之變】……銜は、馬のくつわなり、櫛は、車の中心のかきがねなり、馬のくつわの絶ち切るることあるか、車の中心のかきがねの外、ことあるときは、其の馬車傾覆破損して、乗りたる人の怪我をする變事あるなり、【存變】……變事を用心するなり、【利獸】……利は、利の字なり、獸は、獸の字なり、馬のくつわの絶ち切る、ことあるか、車の中心のかきがねの外、ことありて、其の馬車傾覆破損して、乗りたる人の怪我をする變事ありて、邪魔物を取り拂ひて、道路の中央を擇びたる上にて、馬車を馳せてすら、猶ほ時として

るものなれば、況して蓬蒿の野草の生ひ茂れる中を渉り、丘陵墳墓の間を馳せて、目の前には獸類を射取りて利益せむとする樂ありて、心の内には變事を用心する意なき場合ひには、其の禍を生ずること、亦難からずして、生じ易き道理なり、全體、萬乘の天子の重き御身柄を輕んじたまひて、安全なることをしたまはずして、萬に一つの危きことある道途に出づることを樂みたまひて、之れを日頃の御慰みとしまふは、憚りながら、臣が内と陛下の御爲めに善きことなりとして取り上げぬことなり。

【不垂堂】……堂の端に近寄らぬなり。

蓋明者遠見於未萌、而智者避危於無形、禍固多藏於隱微、而發於人之所忽者也、故鄙諺曰、家累千金、坐不垂堂、此言雖小、可以喻大臣願陛下之留意幸察上善之。

還過宜春宮、相如奏賦、以哀二世行失也、其辭曰、登陂陀之長阪、兮、坐入曾宮之嵯峨、臨曲江之澧州、兮、望南山之參差、巖巖深山之澹澹、兮、通谷豁兮、給瀾、汨滅喻習、以永逝兮、注平臯之廣衍、觀衆樹之塢變、兮、覽竹林之榛榛、東馳土山、兮、北揭石瀨、

【陂陀】……山の横手のなたる、ささなり、(盆入)……打ち並びて入るなり、(曾宮)……廢置にも置なりたる宮殿なり、(參差)……高きさまなり、(澹澹)……水勢の早きさまなり、(廣衍)……大に開くるさまなり、(汨滅)……水勢の早きさまなり、(喻習)……水勢の早きさまなり、(注)……水勢の早きさまなり、(平臯)……平坦なる水邊の地なり、(廣衍)……廣やかなるなり、(榛榛)……漢書には、塢を藪に作り、藪は、樹木の立ち揃もるさまなり、(竹林)……木の盛んなるさまなり、(東馳)……解は、前に見たり、

さて、主上には、長橋宮より運御になりて、宜春宮に立ち寄りたまへり、此の宜春宮は、以前は、秦の離宮にして、二世皇帝の胡亥の園樂に試せられし處なれば、司馬相如は、昔の事を思ひ出で、賦を作りて奏聞して、二世皇帝の行狀の過失を哀み傷みたり、其の言詞に曰はく、「陂陀として、なだれ落ちたる長き坂を登りて、幾重にも置なりたる宮殿の嵯峨として高き處へ人よと打ち並びて進み入りて、曲江の曲がりたる岸のはより洲のあたりまでを見おろし、南山の參差として高低の錯はぬさまを仰ぎ望めば、巖巖として、高き深山は、澹澹として、奥深く、其の山間を通じたる澹谷は、瀾として、空しく開けて、給瀾として、大に開けたり、其の谷川を流る、水勢は、汨滅として、早く、噴習として、軽く響がりて、永く逝き、遠く去りて、平坦なる水邊の地の廣やかなる處へ注ぎ込めり、さまたぐの樹木の塢變として立ち揃りたるを觀つ、竹林の榛榛として盛んなるを覽つ、東の方へ向ひては、土山に馬を馳せ、北の方へ向ひては、石瀨の淺き處を著物の裾をまくりて渡りたり、

【王薈の曰はく、起こし得て、飄落悲慨なりと、

彌節、容與兮、歷弔二世、持身不謹兮、亾國失勢、信讒不寤兮、宗廟滅絕、嗚呼哀哉、操行之不得兮、墳墓蕪穢、而不修兮、魂無歸而不食、食復絕、而不齊兮、彌久遠而愈休、精罔闕而飛揚兮、拾九天而永逝、嗚呼哀哉、

【彌節】……解は、前に見たり、(容與)……解は、前に見たり、(歷行)……身持ちなり、(亾國)……國に同じ、遂になり、(不齊)……整はぬなり、荒れ果てたるをいふ、(伏)……味きなり、(精)……精魂なり、(罔闕)……即ち細細なり、(魂)……魂は、山鬼なり、(拾)……升るなり、(九天)……天に九つの名あり、一つを中天といひ、二つを渙天といひ、三つを從天といひ、四つを夏天といひ、五つを暁天といひ、六つを暁天といひ、七つを渙天といひ、八つを沈天といひ、九つを成天といふ、九天は、廣く虚空を指したるなり、(食)……さて、馬の手綱を扣へて、鬮子を取りながら、容與として、打ち寛ぎて、秦の二世皇帝を此の處を經歷したるに因りて弔へり、二世皇帝は、其の身を持つこと、氣を付けられずして、國を亡ぼし、極勢を失はれ、趙高の讒言を信用せられて、李斯を殺されて、身を終ふるまで、其の過ちを悟られずして、秦の宗廟滅絶し、あつ、さて、哀しく傷ましきことよ、日頃の身持ち其の道を得ずして、墳墓は、蕪穢汗穢して修復せられず、精魂は、便り歸する所なくして、其の靈前に食物を手向けられず、遂に遺遺断絶して、其の修復せられざる墳墓は、荒れ果

てたり、其の年代の彌々久しく遠くなるまゝに、其の跡愈々味くなりて、其の精魂は、宇宙に迷ひて、蜺蜺の山鬼となりて、飛び揚がりて、九天虚空に立ち升りて、永く逝きて、歸らざるなり、あゝ、さても哀しく傷ましきことよ」と、以上、司馬相如の二世を哀める賦なり、

相如拜爲孝文園令、天子既美子虛之事、相如見上好僊道、因曰、上林之事未足美也、尙有靡者、臣嘗爲大人賦、未就、請具而奏之、相如以爲列僊之傳、居山澤、閒形容甚臞、此非帝王之僊意也、乃遂就大人賦、

【靡】……美麗なるなり、【大人】……天子に譬へたるなり、【僊居】……移り易はりて居るなり、【臞】……瘦するなり、

司馬相如は、拜命して、孝文帝の園令の令となりぬ、さて、天子には、既に子虚の賦の事を賞美したまひしが、司馬相如は、主上の頌りに仙人の道を好みたまへるを見て、それに就きて、申し上げて曰はく、「上林苑の事は、まだ御賞美を蒙るに足らぬなり、それよりも尙ほ美麗なる者あり、そは、大人の賦といふ者なり、臣前方に大人の賦を作りたれど、其の賦は、未だ成就せざれば、之れを完全にしたる上にて、奏聞せむことを請ふ」と、斯く申し上げ置きて、さて、司馬相如の思ひけるは、歴々の仙人の山林水澤の間にそれよりそれへと移り易はりて居る有様を考ふるに、其の形體容貌甚だ瘦せて、元氣なければ、此れ帝王の學びたまふ仙人の本意にはあらぬなり、帝王の學びたまふ仙人の本意は、廣大無邊ならざるべからずと、司馬相如は、此の趣向をもて、遂に大人の賦を成就せり、

其辭曰、世有大人兮、在于中州、宅彌萬里兮、曾不足以少畱悲世、俗之迫隘兮、竭輕舉而遠遊、

【中州】……中國なり、【彌】……互るなり、【場】……廣起するさまなり、

其の言葉に曰はく、「世の中に大人といふ者ありて、中國に在り、其の住宅は、萬里の廣さに互りて、常人より見れば、此の上も思はるれど、大人に於ては、曾て暫時も留まり居るに足らざるとして、世俗の切迫狹隘なることを悲みて、場として、廣起して、輕く舉がりて、遠く遊べり、

【又】 康海の曰はく、古人の文を作るには、皆依り做ふことあり、司馬相如の大人の賦は、全く屈平の遠遊の中の語を用ゐたりと、

垂絳幡之素蜺兮、載雲氣而上浮、建格澤之長竿兮、總光耀之采招搖、

【垂】……綫幡之素蜺(分)……赤氣を幡(はた)とし、白氣を綴りたる者を垂るゝなり、漢書には、垂を乗に作れり、乗は、用ゐるなり、【建】……格澤之長竿(分)……格澤の氣は、炎火の形の如く、黃白色にして、地より起りて、天に至る者なり、此の氣をもて長竿としたる者を押し立つるなり、【總】……光耀之采招搖……總は、係くるなり、旄は、天蓋なり、光り耀く五色の氣をもて天蓋として、長竿の先に係くるなり、【旬始】……北斗星の傍に見ゆる、雄雞の形の如き氣なり、【旄】……天蓋の下に係くる吹き流しなり、【指搖】……曳くなり、【彗星】……は、彗星なり、【箕尾】……燕尾なり、吹き流しの先に綴り著くる者なり、【指搖】……指搖は、指搖として、高く、又旄として、風に從ひて、招搖として、ゆらめきたり、【招搖】……解は、前に見えたり、【招搖】……道途に同じ、ゆらめくさまなり、

其の遊行せる有様は、赤氣を幡とし、白氣を綴りたる者を垂れ、雲氣に載りて、大空に上り浮かび、格澤の氣とて、炎火の形の如く黃白色にして地より起りて、天に至る氣をもて長竿としたる者を押して、光り耀く五色の氣をもて天蓋として、長竿の先に係り、旬始とて、北斗星の傍に見ゆる、雄雞の形の如き氣を垂れて、天蓋の下に係くる吹き流しとし、彗星のは、彗星を曳きて、吹き流しの先に綴り著くる箕とせり、其の旄は、指搖として、風のまに、打ち振らして、旄として、高く、又旄として、風に從ひて、招搖として、ゆらめきたり、

攬攬槍以爲旌兮、靡屈虹而爲綢、紅杏渺以眩滑兮、焱風涌而雲浮、

【攬】……引き寄するなり、【攬槍】……槍は、天槍なり、槍は、天槍なり、皆星の名なり、天槍は、長さ四尺にして、末鋭し、天槍は、長さ數丈にして、兩頭鋭し、其の形は、彗星に似たり、【屈虹】……屈虹なり、即ち風曲したる虹なり、【綢】……縞なり、縞は、旗竿の先を包む者なり、【杏渺】……深遠なるさまなり、【眩滑】……まばゆきさまなり、【焱風】……焱は、火花なり、火花に連れて起る風なり、

又彗星に似たる天槍、天槍の星を引き寄せて旄とし、風曲したる虹を縞かし順へて、旗竿の先を包む綢としたれば、其の赤氣の盛んなること、紅色にして、杏渺として、深遠にして、眩滑として、まばゆくして、火花に連れて起る焱風の如くに涌き出で、雲の如くに浮かび上り、

駕應龍象輿之、螭略透麗兮、驂赤螭、青蚪之、螭蟠蜿、低叩天橋、据以驕驚兮、詘折隆窮、蠖以連卷、沛艾赴蟻、佗以怡儼兮、放散畔

岸、驥以孱顏、踉蹌躑躅、容以委麗、兮、綢繆偃蹇、忱矣以梁倚、糾蓼
叫、蹇、踴、以、艘、路、兮、蔑、蒙、踊、躍、騰、而、狂、趨、莅、颯、卉、翕、燦、至、電、過、兮、煥
然霧除、霍然雲消、

【應龍】……翼ある龍なり、【象輿】……解は、前に見えたり、【蟻略遠慮】……行歩進止するさまなり、【騰】……添へ馬なり、【赤蟻、青蟻】……皆龍の類なり、【蛟蟻、蛟蟻】……行歩進止するさまなり、【龍印】……低は、下を向くなり、【天蟻】……頻りに伸ぶるさまなり、【揚】……首を真直に伸ばすなり、【龍驚】……氣儘なるなり、【龍折】……龍は、屈に同じ、身を折り屈むるなり、【龍驚】……驚を擧ぐるなり、【龍】……跳るさまなり、【連卷】……とろろ捲くなり、【沛艾】……頭を揺かすさまなり、【龍】……首を伸べて上下を向くさまなり、【化】……頭を擧ぐるなり、【怡健】……進まざるさまなり、【醉醉】……氣儘なるさまなり、【龍】……龍の姿體のさまなり、【龍】……疾く行きて、忽ち退くさまなり、【龍】……目を揺かし、舌を吐くさまなり、【容】……龍の姿體のさまなり、【委麗】……左右に連れ立ち合ふさまなり、【綢繆】……頭を揺るさまなり、【偃蹇】……躍り高ぶるさまなり、【忱矣】……走るさまなり、【梁倚】……互に附着するさまなり、【糾蓼】……引き合ふさまなり、【龍】……呼び合ふなり、【龍】……地に著くなり、漢書には、踏に作れり、【龍】……至るなり、【象輿】……飛び揚がるなり、【騰】……走るなり、【在輿】……飛びて互に追ひ付くなり、【奔轟】……走りて互に追ひ掛くるなり、【燦】……解は、前に見えたり、【煥然】……明らかなるさまなり、【霍然】……解散するさまなり、

さて、大人の乗れる瑞麗の車の象輿には、翼ある龍の蟻略遠慮として行歩進止せるを繋ぎ付け、赤色の蟻と青色の蟻との蛟蟻蟻として行歩進止せるを添へ馬とせり、其の龍は、或は下を向き、或は上を向き、天蟻として、頻りに伸び、或は首を真直に伸べて、氣儘にし、或は身を折り屈め、驚を擧げ、或は龍として、跳りて、とろろを捲き、或は沛艾として、頭を揺かし、或は蟻略として、首を伸べて、上下を向き、或は頭を擧げて、怡健として進まざる、或は放散して、醉醉として、氣儘なり、或は擧がりて、屏風として、齊しからず、或は龍として、疾く行きて、忽ち進み、忽ち退き、或は龍として、目を揺かし、舌を吐き、或は容たる龍の姿體をして、委麗として、左右に連れ立ち合ひ、或は綢繆として、頭を揺りて、偃蹇として、躍り高ぶる、或は忱矣として、走りて、梁倚として、互に附着し、或は糾蓼として、引き合ひ、或は叫轟として、呼び合ひ、或は地に著きて、路上に至り、或は飛び揚がり、踊り揚がりて、奔轟して、狂ひ走り、或は飛びて、互に追ひ付き、或は走りて、互に追ひ掛たり、其の勢ひの早きことは、火の粉の如くに至り、電光の如くに通ぎ、煥然として、明らかになりて、霧の如くに除却し、霍然として、解散して、雲の如くに消滅せり、大人の龍駕の模倣は、此の如し、

邪絶少陽而登太陰、兮、與真人乎相求、互折窈窕以右轉、兮、橫厲

飛泉以正東、悉徵靈園而選之、兮、部乘衆神於瑤光、使五帝先導、
兮、反太一而從陵陽、左玄冥而右含靈、兮、前陸離而後潘滄、厥征
北僑而役羨門、兮、屬岐伯使尙方、祝融驚而蹕御、兮、清氛氣而後
行、屯余車其萬乘、兮、綵雲蓋而樹華旗、使勾芒其將行、兮、吾欲往
乎南嬉、

【邪】……斜なり、【絶】……渡るなり、【少陽】……東のはてなり、【太陰】……北のはてなり、【真人】……至真仙體の人なり、【窈窕】……山道の奥深きさまなり、【窈窕】……解は、前に見えたり、【飛泉】……谷の名なり、崑崙山の西南に在り、【靈園】……仙人の名なり、【部乘】……手分けをするなり、漢書には、部置に作れり、【瑤光】……北斗七星の中の第一星なり、【五帝】……五時(天を祭る處)にて祭る帝にして、太陰の類なり、【反】……元の座へ返し直すなり、【太一】……天極の大星の一つの明らかなる者なり、【陵陽】……仙人の名なり、【玄冥】……北方の黒帝の輔佐なり、【含靈】……天上の造化の神なり、【陸離】……神の名なり、【潘滄】……神の名なり、【岐伯】……一本には、岐に作れり、黃帝の時の太醫なり、使尙方……東方を主しむるなり、【祝融】……南方の炎帝の輔佐なり、【蹕御】……漢書には、蹕に作れり、從ふべし、天子の入るときに人の往來を止むる掛け聲なり、【清氛氣】……清き氣を清くするなり、【勾芒】……東方の青帝の輔佐なり、【華旗】……從者を引き連るなり、【綵雲】……綵は、合ふなり、五色の雲を合はせて、日除けの傘とするなり、【勾芒】……東方の青帝の輔佐なり、【將】……從者を引き連るなり、【南嬉】……笑むなり、

言樂に曰はく、「余が供連れの車を屯集せること、一萬輛の多きあり、五色の雲を合はせて、日除けの傘として、立派なる旗を押し立てたり、東方の青帝の輔佐なる勾芒をして、從者を引き連れて行かしめよ、吾れは、南の方へ往きて、遊び樂まむと思ふなり」と、大人の神仙を使役せることは、此の如し、

歷唐堯於崇山兮、過虞舜於九疑、紛湛湛其差錯兮、雜逖膠葛以方馳、騷擾衝菑其相紛拏兮、滂滂泱泱以林離、鑽羅列聚叢以龍茸兮、衍曼流爛壇以陸離、徑入雷室之砰磷鬱律兮、洞出鬼谷之崑崙嵬嶷、徧覽八紘而觀四荒兮、竭渡九江而越五河、經營炎火而浮弱水兮、杭絕浮渚而涉流沙、奄息總極、汜濫水嬉兮、使靈媧鼓瑟而舞馮夷、時若夔夔將混濁兮、召屏翳誅風伯而刑雨師、西望崑崙之軋沕恍忽兮、直徑馳乎三危、排闥闔而入帝宮兮、載玉女而與之歸、舒閔風而搖集兮、亢烏騰而一止、低回陰山、翔以紆曲兮、

【崇山】……帝堯を葬りたる山なり、【九疑】……帝舜を葬りたる山なり、【紛】……盛んなるさまなり、【湛湛】……積ることの厚きさまなり、【差錯】……交互なり、たがひちがひなり、【陸離】……解は、前に見えたり、【屏翳】……交上加はるなり、【滂滂】……入り合ふさまなり、【龍茸】……淋瀝に同じ、流るゝさまなり、【陸離】……疾く盛んなるさまなり、【陸離】……進まざるさまなり、【洞出】……廣く出たり、【鬼谷】……深峻なるさまなり、【洞】……通ずるなり、【鬼谷】……北辰の下に在り、衆鬼の衆まる所なり、【雷室】……雷の淵なさまなり、【八紘】……紘は、維なり、四方四隅をいふ、【四荒】……四方の極めて遠き處をいふ、【九江】……廬江の浮陽縣の南に在り、皆東へ

流れて、合ひて大江となる者なり、【五河】……五色の河なり、【炎火】……西域の崑崙山の外に在る山なり、其の山に物を投ずれば、皆燃え上るるとぞ、【弱水】……崑崙山より出づる水なり、【杭絶】……杭は、船なり、絶は、渡るなり、【浮渚】……崑崙山の西に在る流沙の中の渚なり、渚は、なぎさ即ちなみちぎはなり、【奄息】……休息するなり、【總極】……山の名なり、西域の中に在り、【汎濫水嬉】……汎濫は、氾沓といはむが如し、一つ所に止まらずして、彼方此方へ氾沓として、水上に遊び樂むなり、【馮夷】……河伯即ち水神の字なり、【夔夔】……昏昧なるさまなり、【屏翳】……天神の使ひなり、或は雷神なりといへり、【風伯】……風の神なり、【雨師】……雨の神なり、【崑崙】……即ち西域の崑崙山なり、【軋沕恍忽】……皆明らかならぬさまなり、【三危】……山の名なり、【閭闔】……雨の神なり、【帝宮】……天帝の宮なり、【玉女】……天女なり、【青要】、【乘七等】なり、【舒】……徐歩するなり、漢書には、登に作れり、【閭風】……山の名なり、【搖集】……漢書には、搖を遙に作れり、遙に集まるなり、【亢】……高きさまなり、【烏騰】……鳥の如くに飛び上がるなり、【低回】……徘徊するなり、【陰山】……崑崙山の西に在り、

さて、大人の南の方へ往きて遊び樂みたる道筋は、崇山に葬れる帝堯、南唐氏の處を經歷し、九疑山に葬れる帝舜有虞氏の處を通過せしが、其の同勢の行列は、紛として、盛んに、湛濫として、積ること厚くして、たがひちがひになり、入り交り、交上加はりて、方に馳せ、騷擾混雜し、衝菑として、入り合ひ、紛拏として、牽き合ひ、滂滂として、疾く盛んに、決軋として、進み兼ね、打ち破きて、林離として、水の流るゝが如く、衆まり騒なり、列なり衆まり、又衆まりて、龍茸として、龍茸として、行受として、廣やかに、流瀾として、散布して、壇として、廣やかに、陸離として、多くして、直ちに雷の淵の砰磷鬱律として、深峻なるに入り、通じて北辰の下に在りて衆鬼の衆まる鬼谷に入り、徧く八紘四荒の四方八方の隅々までを覽觀し、去りて九江を渡りて、五河を越え、西域の崑崙山の外に在る炎火山を經營して、崑崙山より出づる弱水に浮かひ、崑崙山の西に在る流沙の中の渚を船にて渡りて、流沙を涉り、西域の中に在る總極山に休息し、一つ所に止まらずして、彼方此方に氾沓として、水上に遊び樂み、體極をして、懸の樂器を引き鳴らさしめて、河伯の馮夷に舞ひを舞はしめしが、時しも夔夔として昏昧になりて、混濁ならむとするが如し、是に於て、天神の使ひの屏翳を召し寄せ、風の神の風伯を誅戮して、雨の神の雨師を刑罰し、西の方崑崙山の軋沕恍忽として明らかならぬを望み見て、眞一文字に三危山に馳せ登り、閭闔の天門を推し開きて、天帝の宮へ入り、玉女の天女を車に載せて、之れと共に歸り、閭風山に徐歩して、遙に集まり、亢として、高く、鳥の如くに飛び上がりて、一たび止まり、崑崙山の西に在る陰山に徘徊して、舞ひ上がりて、うねくと紆曲せり、

吾乃今日睹西王母、皦然白首載勝而穴處兮、亦幸有三足鳥爲之使、必長生若此而不死兮、雖濟萬世不足以喜、

なれば、萬世を渡るまで生き延びたりといふとも、喜ぶには足りざらむ」と、大人の天下を周遊して、心に感じたことは、此の如し、
 回車場來兮、絶道不周、會食幽都、呼吸沆瀣、煖朝霞兮、噍咀芝英、
 兮、嘒瓊華、媿侵溥而高縱兮、紛鴻涌而上厲、貫列缺之倒景兮、涉
 豐隆之滂沛、馳游道而脩降兮、驚遺霧而遠逝、迫區中之隘陝兮、
 舒節出乎北垠、遺屯騎於玄闕兮、軼先驅於寒門、下崢嶸而無地、
 兮、上廖廓而無天、視眩眠而無見兮、聽恫恍而無聞、乘虛無而上、
 假兮、超無友而獨存、

【絶道不周】……崑崙山の東南に在る不周山より道筋を取りて渡り越ゆるなり、【幽都】……北方に在り、【沆瀣】……北方の夜半の氣なり、【芝英】……食ふなり、【朝霞】……日の始めて出でむとする時の赤く黄なる氣なり、【噍咀】……嚼むなり、【瓊華】……瓊華は、崑崙山の西なる流沙の濱に生ず、大さ三百圍、高さ萬仞なり、華は、(しべ)なり、之れを食へば、長生きすとぞ、【煖】……頭を仰ぐさまなり、【侵溥】……漸次にといはむが如し、【高縱】……高く自在に升るなり、【紛】……解は、前に見えたり、【鴻涌】……騰り上がるなり、【厲】……厲は、激なり、烈しく升るなり、【列缺】……天門なり、【倒景】……倒さまに映する日月の影なり、人天上に在れば、下に向ひて日月を視るが故に、其の影倒さまになりて、下に在るなり、【豐隆】……雲師、即ち雲の神なり、【滂沛】……雨水の多きさまなり、【遊道】……上文の道遊に同じ、【修降】……長く下るなり、【遺屯】……跡に残れる雲なり、車の馳すること疾きが故に、霧は跡に残るなり、【軼先驅】……馬車の手綱を緩めて、調子を取るなり、【寒門】……北垠は、崖なり、北のはてなり、【玄闕】……北極の山なり、【崢嶸】……遠と通ず、取り残すなり、【廖廓】……天の北門なり、【無地】……深遠なるさまなり、【廖廓】……廣遠なるさまなり、【眩眠】……目の落ち着かぬさまなり、【恫恍】……耳の落ち着かぬさまなり、【無聞】……至るなり、さて、大人は、西王母の生活のむびしげなるを見て、羨むに足らざるを思ひて、車を廻りして、去り來りて、崑崙山の東南に在る不周山より道筋を取りて、渡り越えて、北方に在る幽都へ至りて、會食せり、其の會食には、北方の夜半の氣を呼吸し、日の始めて出でむとする時の赤く黄なる氣を食ひ、芝といへるめでたき苗の花びらちを齧りて、口に含めて之れを味ひ、流沙の濱に生ずる瓊華の葉を小食して、其の會食の済みたる後に、始として、頭を仰ぎて、漸次に高く自在に升り、紛として、盛んに騰り上がりて、烈しく升りて、列缺の天門にて、倒さまに映する日月の影を食ひ、豐隆といへる雲の神の雲を越こし、雨を降らして、其の雨水の滂沛として多き處を涉り、游車導車を馳せて、長く下り、車の跡に残れる霧の間を駆け抜けて、遠く逝き、此の區域の中の狹隘なるに迫り近づきて、窮屈なりとして、馬車の手綱を緩めて、調子を取り

て、北のはてより出で去りしが、其の出で去るときに、屯聚したる騎馬を北極の山なる玄闕に取り殘し、先乗りの騎馬を天の北門なる寒門に取り殘したり、是に於て、大人は、靜かに天地を見渡せば、下なる方は、崢嶸として、深遠にして、地といふ者なく、上なる方は、廖廓として、廣遠にして、天といふ者なく、心を留めて視むとすれば、眩眠として、目は落ち着かずして、目に見ゆるものなく、心を留めて眺むとすれば、恫恍として、耳は落ち着かずして、耳に聞こゆるものなく、身は虛無大空に乗りて、上り至りて、超然として、共に語らむ友なくして、獨り其の場に存在せり、大人の飄然として天上したる有様は、此の如し」と、以上司馬相如の大人の賦なり、司馬相如は、此の賦をもて、仙人の遊に學ぶに足らざることを諷諫せり、
 王靈の曰はく、跌宕なること此に至りて極まれり」と、
 相如既奏大人之頌、天子大說、飄飄有陵雲之氣、似游天地之間、
 意、

【大人之頌】……前には大人の賦といひ、此には大人の頌といへるは、此の賦は、専ら大人を譽めたるによりてなり、
 司馬相如は、既に大人の頌を奏聞せしに、天子には、大に満足したまひて、飄飄として、輕く舉がりて、雲を眼下に見下す如き御氣分ありて、天地の間に遊びたまへる思召しあるに似たりけり、
 相如既病、免家居茂陵、天子曰、司馬相如病甚、可往從、悉取其書、
 若不然、後失之矣、使所忠往、而相如已死、家無書、問其妻、對曰、長
 卿固未嘗有書也、時時著書、人又取去、即空居、長卿未死時、爲一
 卷書、曰、有使者來、求書、奏之、無他書、其遺札、書言、封禪事、奏所忠、
 忠奏其書、天子異之、
 【遺札】……殘し置きたる綴ぢたる木札なり、【封禪】……土を積みて天を祭るを封といひ、地を除ひて地を祭るを禪といふ、
 司馬相如は、既に病氣になりて、役目を免ぜられ、茂陵の家に隱居せしに、天子には、御側の人に仰せられて曰はく、「司馬相如は、病氣甚だ重き由なれば、其の家へ往きて、司馬相如に就き從ひて、其の手に在る自作の書物を残らず受け取るべし、若し今の中に受け取りずば、後日になりて、之れを散失せむ」と、斯く仰せありて、所忠といふ者をして、其の家へ往かしめられしに、司馬相如は、已に死去して、家の

内には、自作の書物なかりしかば、所忠は、之れを怪みて、其の妻の文君に尋ねしに、妻對へて曰はく、「夫の長卿は、白すまでもなく、今日まで、一度も自作の書物を留め置きたることなし、折り、書物を著はしたれど、人又之れを取り去りたれば、即座に空しくなりて、一枚も手に残らずして、其の儘に打ち過ぎたり、さりながら、長卿のまた死去せざる時に、一卷の書物を拵へて、申し残して曰はく、「若し吾が死後に御使者の來りて自作の書物を尋ね求めらるゝことあらば、之れを奏進せよ」と、其の他には、何等の書物もなし」と、斯く對へて、取り出だしたる司馬相如の殘し置きたる綴ぢたる木札に認めたる書物は、天子の天地を祭りたまふ封禪の事を論じたる者なりけり、妻は、之れを所忠の手まで奏進せしかば、所忠は、之れを持ち歸りて、奏聞せしに、天子には、御覽になりて、非常の美文なりとたまひけり、

其書曰、伊上古之初肇、自昊穹兮生民、歷撰列辟、以迄于秦、率邇

者踵武、述聽者風聲、紛綸歲蕤、堙滅而不稱者、不可勝數也、續昭

夏崇號諡、略可道者七十有二君、罔若淑而不昌、疇逆失而能存、

其書曰、伊上古之初肇、自昊穹兮生民、歷撰列辟、以迄于秦、率邇者踵武、述聽者風聲、紛綸歲蕤、堙滅而不稱者、不可勝數也、續昭夏崇號諡、略可道者七十有二君、罔若淑而不昌、疇逆失而能存、

軒轅之前、遐哉邈乎、其詳不可得聞也、五三六經、載籍之傳、維見可觀也、書曰、元首明哉、股肱良哉、因斯以談、君莫盛於唐堯、臣莫

賢於后稷、后稷創業於唐、公劉發迹於西戎、文王改制、爰周邛隆、大行越成、而後陵夷衰微、千載無聲、豈不善始善終哉、然無異端、慎所由於前、謹遺教於後耳、

故軌迹夷易、易遵也、湛恩濛涌、易豐也、憲度著明、易則也、垂統理順、易繼也、是以業隆於襁褓、而崇冠于二后、揆厥所元、終都攸卒、未有殊尤絕迹、可考于今者也、然猶躡梁父、登泰山、建顯號、施尊名、

内には、自作の書物なかりしかば、所忠は、之れを怪みて、其の妻の文君に尋ねしに、妻對へて曰はく、「夫の長卿は、白すまでもなく、今日まで、一度も自作の書物を留め置きたることなし、折り、書物を著はしたれど、人又之れを取り去りたれば、即座に空しくなりて、一枚も手に残らずして、其の儘に打ち過ぎたり、さりながら、長卿のまた死去せざる時に、一卷の書物を拵へて、申し残して曰はく、「若し吾が死後に御使者の來りて自作の書物を尋ね求めらるゝことあらば、之れを奏進せよ」と、其の他には、何等の書物もなし」と、斯く對へて、取り出だしたる司馬相如の殘し置きたる綴ぢたる木札に認めたる書物は、天子の天地を祭りたまふ封禪の事を論じたる者なりけり、妻は、之れを所忠の手まで奏進せしかば、所忠は、之れを持ち歸りて、奏聞せしに、天子には、御覽になりて、非常の美文なりとたまひけり、

后)……文王、武王に勝るなり、[元]……始むるなり、[都]……於の字として見るべし、[卒]……終ふるなり、[殊尤絶迹]……尤は、異なるなり、格別に懸け離れたる事迹なり、[匿]……隠むなり、
 [隠]……されば、周家の仕来りは、平易にして、遠ひ守り易く、其の深恩は、濛濛として、溢れ廣まりて、豊かにし易く、其の憲法制度は、著明にして、手本とし易く、其の統緒を垂れ傳ふることは、道理順當にして、承け継ぎ易し、是を以て、其の王業は、周公且の福祿の中に在る成王を輔佐せしときに隆盛になりて、其の高崇なること、文王、武王に勝りたり、さりながら、其の作爲せられたる事柄は、能く其の始むる所を度して、能く其の終ふる所に終りたるまでのことにて、未だ格別に懸け離れたる事迹の今日に考ふべき者あるにはあらぬなり、さりながら、周の天子は、それにて、猶ほ梁父山を臨み、泰山に登りて、封禪の祭りを行はれて、顯著なる號を建てられ、尊貴なる名を施されたることなれば、漢の天子の封禪の祭りを行はるべきことは、勿論のことなり、

大漢之德、漢涌原泉、沕涌漫衍、旁魄四塞、雲霧散、上暢九垓、下
 派八埏、懷生之類、霑濡浸潤、協氣橫流、武節飄逝、邇陝游原、迴闊
 泳沫、首惡湮沒、闇昧昭哲、昆蟲凱澤、回首面內、然後囿騶虞之珍
 羣、徼麋鹿之怪獸、導一莖六穗、於庖犧、雙貉共抵之獸、獲周餘珍、
 收龜于岐、招翠黃、乘龍於沼、鬼神接靈囿、賓於閒館、奇物譎詭、儼
 儼窮變、欽哉符瑞、臻茲猶以爲薄、不敢道封禪、

【漢涌原泉】……漢は、烽に同じ、原は、源に同じ、烽火の升起、源泉の流る、が如きなり、[沕涌]……盛大なるさまなり、[漫衍]……四方に廣がるなり、[旁魄]……廣く被るさまなり、[九垓]……地の古字なり、[九垓]……垓は、重なるなり、九天をいふ、[派]……流る、なり、[八埏]……埏は、際なり、八方をいふ、[協氣橫流]……和氣の四方に行き渡ること、水の自在に流る、が如きなり、[武節飄逝]……威武の盛んに揚がること、颯風の疾く逝くが如きなり、[邇陝游原]……近くして狹き土地の者は、恩澤の源に游ぶなり、[迴闊泳沫]……迴闊は、遠くして廣きなり、沫は、漢書には、末に作れり、從ふべし、遠くして廣き土地の者は、恩澤の源に泳ぐなり、[首惡湮沒]……惡事の張本人なり、[闇昧昭哲]……暗昧なる者は、光明を得るなり、[昆蟲凱澤]……凱は、樂むなり、澤は、悅ぶなり、昆蟲の類まで樂み悦ぶなり、[回首面內]……内へ向ふなり、[囿騶虞]……騶虞のことなり、[獲]……獲るなり、[雙貉共抵]……貉は、何なり、抵は、本なり、二本の角にて、其の本の一本なる獸なり、孝武帝の白駒を獲たことをいふ、[賓於閒館]……周の餘珍は、周の餘りの珍寶にして、周の鼎のことなり、岐は、水の名なり、漢書には、珍の字なくして、收を放し作り、[翠黃]……黃は龍の如く、身は馬の如き者にして、黃帝の乘り

て山に登りし者なりとぞ、[乘龍]……四匹の龍なり、[鬼神接靈囿]……武帝神仙人を求めて、長陵の女子を得たり、其の女子能く鬼神と交接して、昔の仙人の靈囿に似たりければ、之れを山林苑の閑靜なる館舎に匿きて、神君と唱へて、客分として待遇せり、此の事をいへるなり、[譎詭]……不思議なるなり、[儼儼]……非凡なるなり、[欽哉]……謹愼せよなり、
 [大漢の德]……烽火の升起、源泉の流る、が如く、沕涌として、盛大にして、四方に廣がり、旁魄として、廣く被りて、四方に塞がり、雲の如くに布き、霧の如くに散じて、上は九垓の九天に暢び、下は八埏の八方に流れ、假り初めにも、生きむことを思ふ品類は、皆其の恩澤に潤ひて、和氣の四方に行き渡れることは、水の自在に流る、が如く、威武の盛んに揚がることは、颯風の疾く逝くが如くなれば、近くして狹き土地の者は、恩澤の源に泳び、遠くして廣き土地の者は、恩澤の末に泳ぎ、遠近共に恩澤に浴せざるはなく、惡事の張本人は、湮沒して、影だに見えず、暗昧なる者は、光明を得て、夜の明けたるが如く、昆蟲の類まで、樂み悦びて、首を廻らして、内へ向ひて、其の德を慕へり、斯くありて後に、騶虞の類を仁獸の如き多くの珍獸を苑囿に充てられ、麋、鹿、其の他の怪獸の自ら來るを遮り止めて、之れを飼ひ置かれ、一本の莖より六本の穂を生じたる嘉禾の米を御廩所にて擇ばれて、祭祀の料に供せられ、二本の角にて其の本の一本なる獸を犧牲の用に供せられ、周の餘りの珍寶なる鼎を獲られ、吉凶を卜する龜を岐水より取り上げられ、昔し黃帝の乘りて山に登られしといへる、黃は龍の如く身は馬の如き者と、四匹の龍とを、池沼より招き寄せられ、鬼神と交接する仙人の靈囿に似たる者を、山林苑の閑靜なる館舎に置かれて、客分として待遇せられたり、凡そ是等の奇異なる物は、一と不思議非凡にして、殊らず變異を窮めたり、然れども、天子には、謹愼せよと仰せられて、芽出度符瑞は、是れ程までに至りたれども、猶ほ德薄しと思し召されて、決して封禪の祭りの事を仰せ出だされぬなり、漢の御德の深厚なることは、此の如し、

蓋周躍魚隈、杭休之以燎、微夫斯之爲符也、以登介丘、不亦惡乎、
 進讓之道、其何爽與、

【隈杭】……船の中に落ち入りたるなり、[休]……吉兆なり、[燎]……火を焚きて、天を祭るなり、[介丘]……介は、大なり、丘は、山なり、太山のことなり、[惡]……愼むるなり、面目なきなり、[進讓之道]……周の進めて封禪の祭りを行ひたる仕方と、漢の譲りて之れを行はざる仕方となり、[爽]……間違ふなり、
 [蓋]……蓋し思ふに、周の武王は、河水を渡られたるときに、躍り跳ねたる白き魚の王の船の中に落ち入りたるを、うつむきて取られて、之れを吉兆なりとせられて、火を焚きて、天を祭られし、かばかりの事を符瑞なりとせられしは、實に輕微にして、取るに足らざるることよ、武王の此の事をもて、太山に登りて、封禪の祭りを行はれし、亦面目なきことならざらむや、周に在りては、僅に魚の躍り込みたる一事のみなれば、未だ封禪の祭りを行はるべきことにもあらず、漢に於ては、前に擧げたる莫大の符瑞あることなれば、既に封禪の祭りを行はるべき筈なり、されば、周の進めて之れを行はれたる仕方と、漢の譲りて之れを行はざる仕方とは、何とてかやうに間違ひたるものか、心得難き次第なり、
 [蓋]……蓋分の曰はく、大に周を貶として、漢を進めたるが故に、文人の辭とす、然れども、是の如くならずれば、挫抑して氣を發するに足らざると、

於是大司馬進曰陛下仁育羣生義征不愾諸夏樂貢百蠻執費德侔往初功無與二休烈浹洽符瑞衆變期應紹至不特創見意者泰山梁父設壇場望幸蓋號以況榮上帝垂恩儲社將以薦成陛下謙讓而弗發也挈三神之驪缺王道之儀羣臣慙焉

【不愾】……願はざるなり、【諸夏】……中國の人民をいふ、【執費】……獻上物を手に執るなり、【侔往初】……往古の初帝の帝王と同等なるなり、【休烈】……解は前に見えたり、【浹洽】……普く行き渡るなり、【紹】……繼ぐなり、【意者泰山梁父設壇場望幸蓋號以況榮】……意者は、大司馬の推量するなり、幸は、臨幸なり、蓋は、發語の言葉なり、號は、名號なり、況は、既と通ず、賜ふなり、榮は、寵榮なり、思ふに泰山と梁父山との山の神は、其の山上に封禪の祭りを行ふ壇場を設けられて、天子の臨幸して、天帝の寵榮を賜はり受けて、名號とせられむことを願ひ望めるならむとの義なり、但し、意者の二字は、下句の「成」まで係り、【上帝】……天帝なり、【儲社】……福社を積むなり、【薦成】……衆瑞の物を上天に薦めて、成功を告ぐるなり、【挈三神之驪】……挈は、絶つなり、驪は、數に同じ、天の神、地の神、山の神の歡心を絶つなり、

是に於て、大司馬の役人は、天子の御前へ進み出で、申し上げて曰はく、陛下には、仁愛は、羣生衆庶を撫育したまひ、義武は、朝命に順はざる者を征伐したまへば、中國の人民は、貢物を上納することを樂み、百蠻の外夷は、獻上物を手に執りて入朝せり、其の德業は、往古の初帝の帝王と同等にして、其の功績は、陛下と共に並びて二つになる者なし、されば、美功は、普く行き渡り、符瑞は、衆多の變異を呈し、其の期に應じて、續々として、繼ぎ至りて、獨り一物の初めに見えたるのみにあらず、臣は、思ふに、泰山と梁父山との山の神は、其の山上に封禪の祭りを行はる、壇場を設けられて、陛下の臨幸したまひて、天帝の寵榮を賜はり受けて、名號とせられむことを願ひ望めるなり、又天帝は、恩惠を垂れ、福社を積まれて、陛下の封禪の御場所に於て、衆瑞の物を上天に薦めたまひて、其の成功を告げたまふことを待たる、ならむ、ざるを、陛下には、謙遜辭讓したまひて、封禪の事を發議したまはぬなり、是れ天の神、地の神、山の神の歡心を絶ちたまひて、王道の儀式を缺きたまふことなれば、羣臣は、之れを面目なく思へり、

【揚慎の曰はく】……此段、託するに大司馬をもて進言せりと、○漢雅陸の曰はく、諸夏樂貢より下は、功績の盛んなることを言ひ、符瑞衆變より下は、符瑞の盛んなることを言ひ、泰山より下は、謙讓して封禪せざるは道に於て爽へりとする意を言へりと、○又曰はく、上には、周は封禪するをもて恩と云ひ、此には、漢は封禪せざるをもて恩と云ふ、二つの恩の字相應じたりと、

或謂且天爲質闇珍符固不可辭若然辭之是泰山靡記而梁父

靡幾也亦各竝時而榮咸濟世而屈說者尙何稱於後而云七十
二君乎夫修德以錫符奉符以行事不爲進越故聖王弗替而修
禮地祇謁款天神勒功中獄以彰至尊舒盛德發號榮受厚德以
浸黎民也皇皇哉斯事天下之壯觀王者之丕業不可貶也願陛
下全之

【天爲質闇】……天道は、暗昧にして、物を言ふことなく、符瑞をもて、其の意を示すなり、【靡記】……名號の表記することなきなり、【靡幾】……願ひ望むことなきなり、【亦各竝時而榮咸濟世而屈】……昔の帝王も亦銘とに但し一時の繁榮に止まりて、封禪の祭りを行ひたる遺迹なくして、皆其の一代を舉へて、其の榮名の絶え果てたらむにはといふことなり、【錫】……賜はるなり、【行事】……封禪の事を行ふなり、【進越】……分限を差し越ゆるなり、【弗替】……封禪の祭りを廢せざるなり、【地祇】……地の神なり、【謁款】……天神に謁するなり、【款】……款なり、【勒】……石に刻み付くるなり、【中獄】……中獄なり、先づ中獄に禮して、泰山に臨幸するなり、【浸】……恩澤を普及するなり、【皇皇】……盛んなるさまなり、【丕業】……大業なり、【貶】……輕んじ見下すなり、【全之】……封禪の祭りを舉げ行ひて、其の終はりを全くするなり、一説には、全は、念の誤りならむ、下文の「還思慮」と相應ずといへり、

或る人の申したるには、其のうへに、天道は暗昧にして、物を言はるることなく、符瑞をもて、其の意を示さるゝものなれば、珍異の符瑞あるときは、言ふまでもなく、辭讓したまふべからず、若し其のやうに辭讓したまはむには、是れ泰山には名號を表記せらるることなくして、梁父山には願ひ望まるることなく、泰山の神も、梁父山の神も、共に本意なく思はるゝならむ、昔の帝王も、亦銘とに但し一時の繁榮に止まりて、封禪の祭りを行はれたる遺迹なくして、皆其の一代を舉へて、其の榮名の絶え果てたらむには、之れを説く者、それにては尙ほ何とて後世に稱道して七十二君ありと云ふべき、全體、人君たる者の徳を修めて、皇天よりの符瑞を賜はりて、其の符瑞を捧げて、封禪の事を行はるゝは、分限を差し越えたりとせず、されば、昔の聖王は、封禪の祭りを廢せずして、禮を地の神に修め、誠を天の神に告げ、其の功績を中獄の嵩山の石に刻み付けて、至尊を表彰し、盛徳を展舒し、號號を發揚し、厚德を受納して、黎民衆庶に恩澤を普及せられき、皇皇として盛んなる此の封禪の事は、天下の壯觀にして、王者の大業なれば、決して輕んじ見下すべきことにあらぬなりと、或る人の説も、此の通りなれば、願はくは陛下の封禪の祭りを舉げ行ひたまひて、帝王の事業を全くしたまはむことを、

揚慎の曰はく、或謂より下は、天は示すに符瑞を以てしたれば、辭すべからず、天意を承けて、事を行ふは、豈進越なりと謂はむやと言ひて、申ねて封禪せざることを爽へるなりと、○漢雅陸の曰はく、七十二君は、前に應じたりと、○又曰はく、此の進の字は、上の進讓之道の進の字に應じたりと、○又曰はく、願陛下全之は、上の挈三神之驪、缺王道之儀と相顧みたりと、

而後因雜薦紳先生之略術使獲耀日月之末光絕炎以展采錯事猶兼正列其義校飭厥文作春秋一藝將襲舊六爲七據之無窮俾萬世得激清流揚微波蜚英聲騰茂實前聖之所以永保鴻名而常爲稱首者用此宜命掌故悉奏其義而覽焉

【絶炎】……殊絶なる光りなり、【展采】……采は、官なり、其の官職を展べ動かすなり、【錯事】……其の事業を設け置くなり、【正列】……其の事を正し、人事を列ぬるなり、【校飭】……校は、一本には、説に作れり、説は、除くなり、舊事を除き去りて、更に新文を飾るなり、【一藝】……一經なり、【襲舊六爲七】……舊來の六經に今作りたる一經を加へて、七經とするなり、【據之無窮】……布くなり、【據名】……大名なり、【稱首】……稱道せらるる、魁首なり、【掌故】……故事先例を掌る役なり、【悉奏其義】……義は、備と通ず、漢書には、備に作れり、而して後に、其の封禪の祭りを舉行はれたるに因りて、製束を著用したる貴人、學徳ある先生の方略技術を雜へ取りて、其の文章をもて、功業を記述せしめて、日月の末光にも比ぶべき陛下の殊絶なる光炎を耀かして、其の官職を展べ動かせ、其の事業を設け置くことを得しめられ、猶ほ其の上にも、天時を正し、人事を列ぬ、舊事を除き去りて、更に新文を飾りて、當代の春秋の一經を作り、將た舊來の六經に今作りたる一經を加へて、七經として、之れを窮まりなき後々にまで布き傳へて、天下萬世をして、其の清流を激揚し、微波を發揚し、英偉なる聲聞を飛揚し、茂盛なる果實を騰馳することを得しめたまへ、前代の聖王の永く大名を保ちて、常に天下に稱道せらるる、魁首となられたる譯は、此の封禪を用ひられたればなり、此の譯けなれば、宜しく故事先例を掌る掌故の役人をして、殘らず其の儀式の次第を奏聞せしめられて、之れを覽覽したまふべし」と、以上、大司馬の申し上げたる言葉なり。

於是天子沛然改容曰愉乎朕其試哉乃遷思回慮總公卿之議詢封禪之事詩大澤之博廣符瑞之富

乃作頌曰自我天覆雲之油油甘露時雨厥壤可游滋液滲漉何生不育嘉穀六穗我穡曷蕃

非唯雨之又潤澤之非唯濡之汜專溲之萬物熙熙懷而慕思名山顯位望君之來君乎君乎侯不邁哉

般般之獸樂我君囿白質黑章其儀可嘉呶呶睦睦君子之能蓋聞其聲今觀其來厥塗靡隴天瑞之徵茲亦於舜虞氏以興

【油油】……雲の行くさまなり、【時雨】……種よき時に降る雨なり、【廣壤可游】……游は、泳ぐなり、種よき時に降る雨の多くして、其の土壤の泳がる、種になるなり、恩澤の溢るるに譬へたるなり、【滋液】……滋養する水液なり、【滲漉】……水の下り流るるさまなり、【我穡曷蕃】……我が播く山の物成りを何方にか蕃へ置くべきなり、【我穡曷蕃】……是に於て、農臣は、大なる徳澤の博きこと符瑞の富めることを譽め立てたる頌詩を作りて曰はく、『我が天の萬物を覆へるより、雲は油油として行きて、甘露のやうに結構なる種よき時に降る雨は、其の量甚だ多くして、其の土壤は泳がる、種になりたれば、其の滋養する水液は、滲漉として、下り流れて、行き渡りて、何の生物か長育せざらむ、皆其の生を遂げらるるなり、此の潤澤に依りて、嘉穀は、一本の莖に六本の穂を生じたれば、我が播く山の物成りは、何方にか蕃へ置くべき、置き處なき種に取り上がりたり、天恩の優渥なると、此の如し、非唯雨之又潤澤之、非唯濡之、汎專溲之、萬物熙熙、懷而慕思、名山顯位、望君之來、君乎君乎、侯不邁哉、』

は、實に天より降りたる祥瑞の徴候なり、今、此の處にも、亦百獸の引き連れ合ひて舞ひ踊りきといへる帝舜の時代に於けるが如く、有虞氏

の如き聖天子再興したまへり、祥瑞の一つの瑞處のさまは、此の如し、
濯濯之麟、游彼靈時、孟冬十月、君徂郊祀、馳我君輿、帝以享社、三代之前、蓋未嘗有、

【濯濯】肥え太りて、毛色の光澤あるさまなり、【游彼靈時】孝武帝の雍の地へ臨幸して、五時を祭りし時に、白麟を獲たることをいふ、【孟冬】初冬なり、【徂】往くなり、【帝以享社】天帝の祭りを受納して、其の答禮に、福祉を降したるなり、【三代之前】今より前の夏、殷、周、の三代の世なり、

又濯濯として肥え太りて毛色の光澤ある麒麟は、彼の靈時に來り遊べり、頃しも初冬の十月に、我が君靈時へ往きたまひしに、此の仁獸は、我が君の御馬車の前を馳せ通りたれば、我が君之れを供物として、天を祭りたまひしに、天帝之れを受納せられて、其の答禮に福祉を降されたり、今より前の夏、殷、周の三代の世には、多分一度も斯かる芽出度例しあらざらむ、祥瑞の一つの麒麟の事は、此の如し、

宛宛黃龍、興德而升、采色炫耀、熿炳輝煌、正陽顯見、覺寤黎烝、於傳載之、云受命所乘、

【宛宛】風伸するさまなり、【炫耀】光り耀くさまなり、【熿炳輝煌】光り耀くさまなり、漢書には、浪を煙に作れり、従ふべし、【正陽顯見】正陽は、陽明なり、南面して羣臣の朝見を受くるなり、【覺寤黎烝】衆民に心付かするなり、【傳】易傳なり、易經に、時に六龍に乗りて天を御すとあり、

又宛宛として風伸せる黄色なる龍は、我が君の至徳に感じて、興こり起ちて、天に升起しが、其の采色の光り耀くこと、熿炳輝煌として、八方に照り渡りたれば、我が君南面したまひて、羣臣の朝見を受けたまひて、天より祥瑞を降されたることを衆民に心付かせたまへり、是れ易傳に「時に六龍に乗りて天を御す」と載せたる通り、龍といふ者は、天命を受けて天子となりたる人の乗るべきものなればなり、祥瑞の一つの黃龍の事は、此の如し、

厥之有章、不必諄諄、依類託寓、諭以封禪、

【有章】祥瑞を以て聖王の徳を章明にすることあるなり、【諄諄】言語を以て丁寧に告ぐるなり、【依類託寓】事の類に依りて、其の意を寄するなり、【封禪】山なり、泰山に封禪するをいふ、それ此の如く、天は、祥瑞を以て、聖王の徳を章明にせらるることありて、屹度諄諄として言語を以て丁寧に告げらるゝものとは限らず、事の類に依りて、其の意を寄せて、泰山に封禪せよとの旨を諭されたり、祥瑞の事は、總べて此の如し、

披藝觀之、天人之際、以交、上下相發、允答聖王之徳、兢兢翼翼也、故曰、興必慮衰、安必思危、是以湯武至尊、嚴不失肅、祗舜在假、典顧省厥遺、此之謂也、

【披藝觀之】藝書を開くなり、【天人之際】以は、已と通ず、天と人との間に於て、已に交はり感ずるなり、【允】誠なり、【兢兢翼翼】戒むるさまなり、【興】盛なり、【衰】衰なり、【安】安んずるなり、【危】危なり、【嚴】厳なり、【失】失なり、【肅】肅なり、【祗】敬なり、【舜在假】舜の假を假するなり、【顧省厥遺】經書を開くなり、【此之謂也】此の謂ふことなり、

【披】天の大なる法則を觀察するなり、【觀】己の政化の遺失することありむことに氣を付くるなり、【藝書】經書を開きて、之れを考へ觀るに、今、天と人との間に於て、已に交はり感じて、天と人との上下互に發作し、天より祥瑞を降されたるは、誠に聖王の徳の威光として、戒懼せられ翼として敬畏せられたるに報い答へられたるなり、されば、古語に、「國家の興隆したるときは、屹度衰微せむことを慮りて、其の用心をし、國家の安泰なるときは、屹度危險ならむことを思ひて、其の用心をするなり、是を以て、殷の湯王、周の武王は、至りて尊嚴にして、何人にも指をささるゝことなしといへども、常に其の身を用心せられて、肅敬することを失はれざりき、帝舜は、天の大なる法則を觀察せられて、己の政化の遺失することありむことを氣を付けられき」とあるは、皆天意に違はざらむやうにせられたる者なり、されば、今、漢に於て、亦天心に順ひて、封禪の祭りを擧げ行はるべきことなり」と、以上、司馬相如の封禪の事を論じたる者なり、

董份の曰はく、封禪の書、未だ數言ならずして、亦風説せり、相如の靡なるを以てす、此の如し、古人の徳に作りしことを知ると、
司馬相如既卒、五歲、天子始祭后土、八年而遂先禮中嶽、封于太

山、至梁父、禪肅然、

【后土】地なり、后は、之れを尊びていふ、【肅然】山の名なり、泰山の麓の東北に在り、天子には、其の趣意を尤なりと思し召されたるものと見えて、司馬相如の既に卒去せし後、五年目になりて、始めて后土を祭りたまひ、八年目になりて、遂に先づ中嶽の嵩山に禪したまひ、泰山に封じたまひ、梁父山へ至りたまひ、肅然山に禪したまひけり、

相如他所著、若遺平陵侯書、與五公子相難、草木書篇、不采、采其

尤著公卿者云

司馬相如の此の他に著はせる者の中に、平陵侯の蘇建に差し送らるる手紙、五公子と草木の事を離間し合ひたる手紙の諸篇の如きは、此の傳の中に採りて載せず、其の尤も公卿の間に流布して著明なる上文の如き者のみ採りて載せつ。

太史公曰、春秋推見至隱、易本隱之以顯、大雅言王公大人、而德逮黎庶、小雅譏小己之得失、其流及上、所以言雖外殊、其合德一也、相如雖多虛辭濫說、然其要歸引之節儉、此與詩之風諫何異、

揚雄以爲靡麗之賦、勸百風、一猶馳騁、鄭衛之聲、曲終而奏雅、不已、虧乎、余采其語、可論者著于篇。

揚雄の思ひけるは、司馬相如の華美なる賦は、百事を勸誘して一事を諷諫せるが如く、割り合ひの者なれば、さながら鄭の國衛の國の淫聲を馳騁亂奏して、其の聲曲の終はりたる後に、雅正なる音楽を奏するが如し、甚だ本旨を虧損したるものならざらむや、甚だ本旨を虧損

したるものなるべしと、余れは、其の語の論ずべく観るべき者を探りて、此の篇中に著はし傳へたりと、

淮南衡山列傳第五十八

淮南衡山列傳第五十八

淮南厲王長者高祖少子也其母故趙王張敖美人高祖八年從東垣過趙趙王獻之美人厲王母得幸焉有身趙王敖弗敢內宮爲築外宮而舍之

及貫高等謀反栢人事發覺并逮治王盡收捕王母兄弟美人繫之河內厲王母亦繫告吏曰得幸上有身吏以聞上上方怒趙王未理厲王母厲王母弟趙兼因辟陽侯言呂后呂后妬弗肯白辟

陽侯不彊爭

【述治】……逮捕して、吟味するなり、遠は、前に捕へたる者の口供を手掛かりとして、跡の者を捕ふることなり、【詳陽侯】……審其其な

趙の相國の賈高等の柏人縣にて謀反して、高祖を殺害せむとせしことの露顯するに及びて、賈高等と合併して、趙王を逮捕して吟味せしめられ、趙王の母、趙王の兄弟及び趙王の側附の美人並に、瓊瑤、捕りて、之れを河内の牢屋に繋ぎしめられたり、其の時、厲王の母も、亦同様に繋ぎられたれば、牢屋の役人に告げて曰く、「此の身は、主上に寵せらるゝことを得て、身重になりぬ」と、牢屋の役人の事を聞き、大に驚きて、其の趣きを主上の御前に入れたるに、主上には、趙王の事を怒りたまへる最中なりければ、厲王の母の事は、棄て置きたまひて、何とも處分したまはざりけり、厲王の母の弟の趙兼、之れを心配して、日頃呂后の御氣に入りの辟陽侯の審食其に依頼して、師の御氣を宿したることを呂后に言上せしめしに、呂后には、嫉妬の深き御方なれば、其の事を主上に申し上げらるゝことを承知したまはざりければ、辟陽侯も呂后の氣色を伺ひて、強ひて之れを争ひ論ぜずして、其の儘に打ち過ぎたり、

及厲王母已生厲王、悲即自殺、吏奉厲王詣上、上海令呂后母之、而葬厲王母、眞定、眞定、厲王母之家在焉、父世縣也、

【志】……恨み怒るなり、父世縣……父祖の代より世々住まひたる縣なり、

厲王の母は、已に厲王を出産するに及びて、其の身の牢屋に繋ぎられたるを恨み怒りて、其の分曉するを待ちて、即座に自殺せしかば、牢屋の役人重むて大に驚きて、其の生か落としたる厲王を取り上げて、之れを捧げて、主上の御前へ出でるに、主上には、厲王の母の事を棄て置きたまひしことを後悔したまひて、呂后をして、厲王の母となりて之れを養育せしめられて、厲王の母の遺骸を眞定の地に埋葬せられけり、眞定は、厲王の母の家の在る處にして、父祖の代より、世々住まひたる縣なれば、其の縁を以て、此に埋葬せられたるなり、

高祖十一年十月、淮南王黥布反、立子長爲淮南王、王黥布故地、凡四郡、上自將兵擊滅布、厲王遂即位、

高祖の十一年の十月に、淮南王の黥布謀反せしかば、主上には、御末子の長を立て、淮南王としたまひて、黥布の以前の領地に王とせられたり、其の土地は、凡べて、四郡にして、九江、廬江、衛山、豫章なり、斯くて、主上には、自ら兵に將として、黥布を撃ちて、之れを滅ぼしたまひければ、厲王は、遂に淮南王の位に即けり、

厲王蚤失母、常附呂后、孝惠、呂后時、以故得幸、無患害、而常心怨

昭和八年十一月五日 印刷
昭和八年十一月十日 發行

— 定價金壹圓五拾錢 —

史記列傳講義
三



編纂者 興文社編輯所
代表者 石川寅吉

發行所 興文社
代表者 石川寅吉

東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地

發行所

東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
振替貯金口座東京一八四四番
電話浪花(84)一四〇・一八四〇・一八四一番

株式會社 興文社

351
557

終